今明かされる古代寺院
美濃山廃寺の姿

１．美濃山廃寺の発掘調査から古代寺院を解明

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　筒井崇史　Ｐ１～P17

２．美濃山瓦窯跡の成立と展開

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　引原茂治　P18～P25

３．美濃山廃寺の歴史的位置づけ
―地域社会と美濃山廃寺―

八幡市教育委員会　小森俊寛　P26～P34

日 時：平成 25 年 5 月 25 日（土）　午後 1 時 40 分～ 4 時 40 分
場 所：八幡市文化センター　小ホール
主 催：京 都 府 教 育 委 員 会
　　公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
共 催：八 幡 市 教 育 委 員 会

京埋セミナー資料 No.124 － 379

美濃山廃寺（みのやまはいじ）の発掘調査から古代寺院を解明

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

主任調査員　筒井崇史

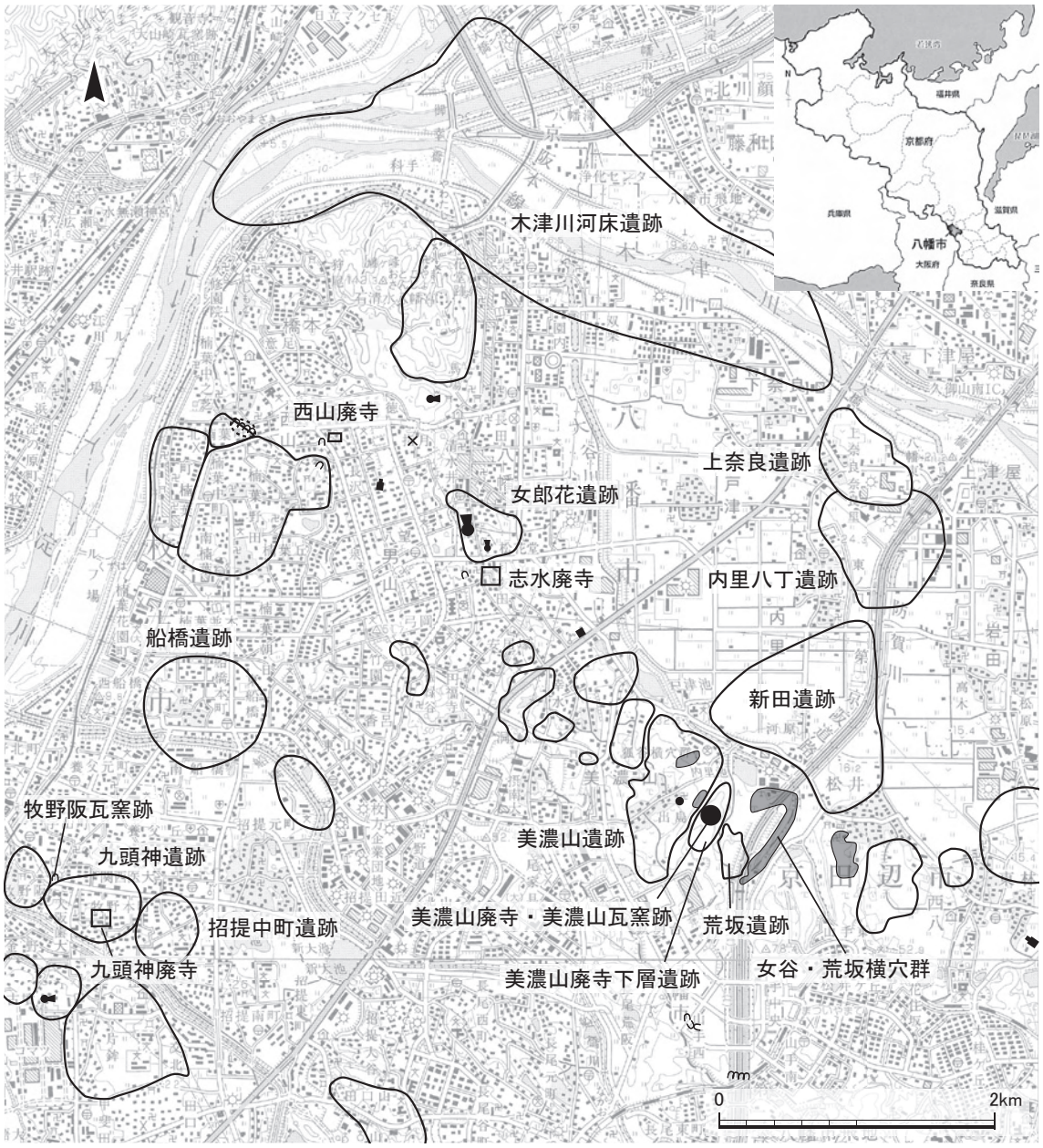
１. はじめに

美濃山廃寺は、京都府八幡市美濃山古寺に所在し、古代の瓦が多く散布することや「古寺」という字名及び八幡市教育委員会が実施した範囲確認調査により、古代寺院の存在が知られていました。今回、新名神高速道路整備事業とそれに関連する事業に伴い大規模な発掘調査を実施しました（美濃山廃寺第６～９次調査）。調査はほぼ平成23年度の１年間を費やし、調査面積は16,000㎡に達します。これによって美濃山廃寺のほぼ全域を調査することになりました。また、調査の結果、美濃山廃寺が奈良時代を中心とする寺院であることが明らかになりました。

２.位置と環境

美濃山廃寺は八幡市の南西部に位置し、京田辺市や大阪府枚方市に接しています。奈良時代においては山背国綴喜郡（やましろのくにつづきのこほり）に属していました。

八幡市内では、奈良時代の遺跡がたくさん確認されています（第１図）。まず、美濃山廃寺以外の古代寺院として西山廃寺（にしやまはいじ）や志水廃寺（しみずはいじ）があります。八幡市内で確認されている古代寺院はこの３か所で、いずれも男山丘陵の丘陵上に営まれています。次に、平野部や丘陵裾部では上奈良遺跡（かみならいせき）・内里八丁遺跡（うちさとはっちょういせき）・女郎花遺跡（おみなえしいせき）などの集落遺跡が確認されています。上奈良遺跡・内里八丁遺跡では大型の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）や銭貨（せんか）などが出土しており、官衙（かんが）（古代の役所）の可能性も指摘されています。また内里八丁遺跡では、古代の官道（かんどう）である「山陰道」と推定される道路遺構も見つかっています。



第１図　美濃山廃寺周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

３.これまでの調査

①昭和52年の調査　市誌編纂のために小規模な発掘調査が実施されました。この調査で、掘立柱建物や溝などが検出されましたが、明確に寺院に関連する遺構は検出されませんでした。

②平成11～15年の調査　市教育委員会により美濃山廃寺の広がりや堂宇(どうう)の配置状況、具体的な年代を知るための範囲確認調査が実施されました。調査の結果、寺域(じいき)の区画溝(くかくみぞ)をは

じめ、掘立柱建物や土坑、柱穴などが多数検出されました。また、大量の瓦や土器をはじめ、仏具と思われる奈良三彩や覆鉢形土製品、ひさご形土製品などが出土しました。仏具と思われる遺物の出土により、寺院跡である可能性は高まりました。

４.検出遺構の概要

今回の一連の調査の結果、竹林等による地形の改変が著しかったものの、礎石・掘立柱併用建物１棟、掘立柱建物跡29棟、区画溝４条、瓦窯跡５基をはじめ、土坑、柱穴、瓦溜り、鉄器生産関連遺構、溶解炉など多数を検出しました(第２図)。ここではおもな遺構について紹介します。

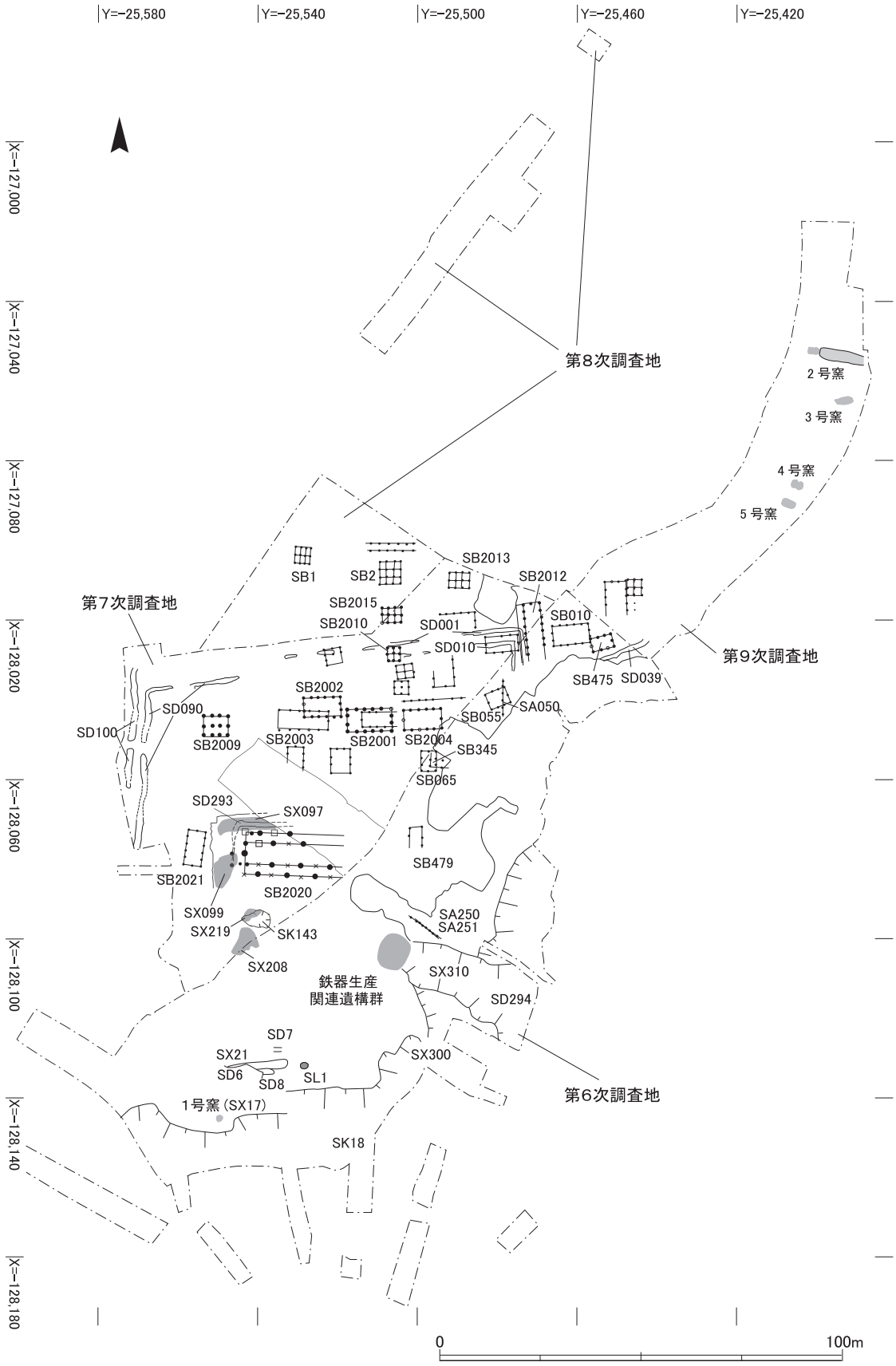
区画溝ＳＤ001・010・090・100　寺域を区画する溝です。調査の結果、２条の溝がほぼ平行してめぐっていますが、北東部ではやや鋭角に、北西部では鈍角に屈曲するため、推定される区画は方形ではなく、やや歪な台形状と推定されます。北辺の総延長は97m、西辺の確認長は45m、東辺の残存長は11mです。西辺のＳＤ090で大量の平瓦がまとまって出土しました。

掘立柱建物ＳＢ2001・2002・2004　調査地の中央部北半で検出した比較的規模の大きな掘立柱建物です。これらは桁行５間(9.1～10.9m)、梁行２～３間(4.5～5.5m)の建物ですが、建物が近接して見つかったことから、建て替えられたものと考えています。これら３棟は、建物の規模が大きな点などから見て、美濃山廃寺における主要な施設の１つと考えています。これらの建物の柱穴や周辺では、硯の破片なども見つかっており、建物の規模と合わせて、寺院の運営などの事務(これを「寺務」といいます)を行った施設と考えています(第10図の第Ⅰ群)。

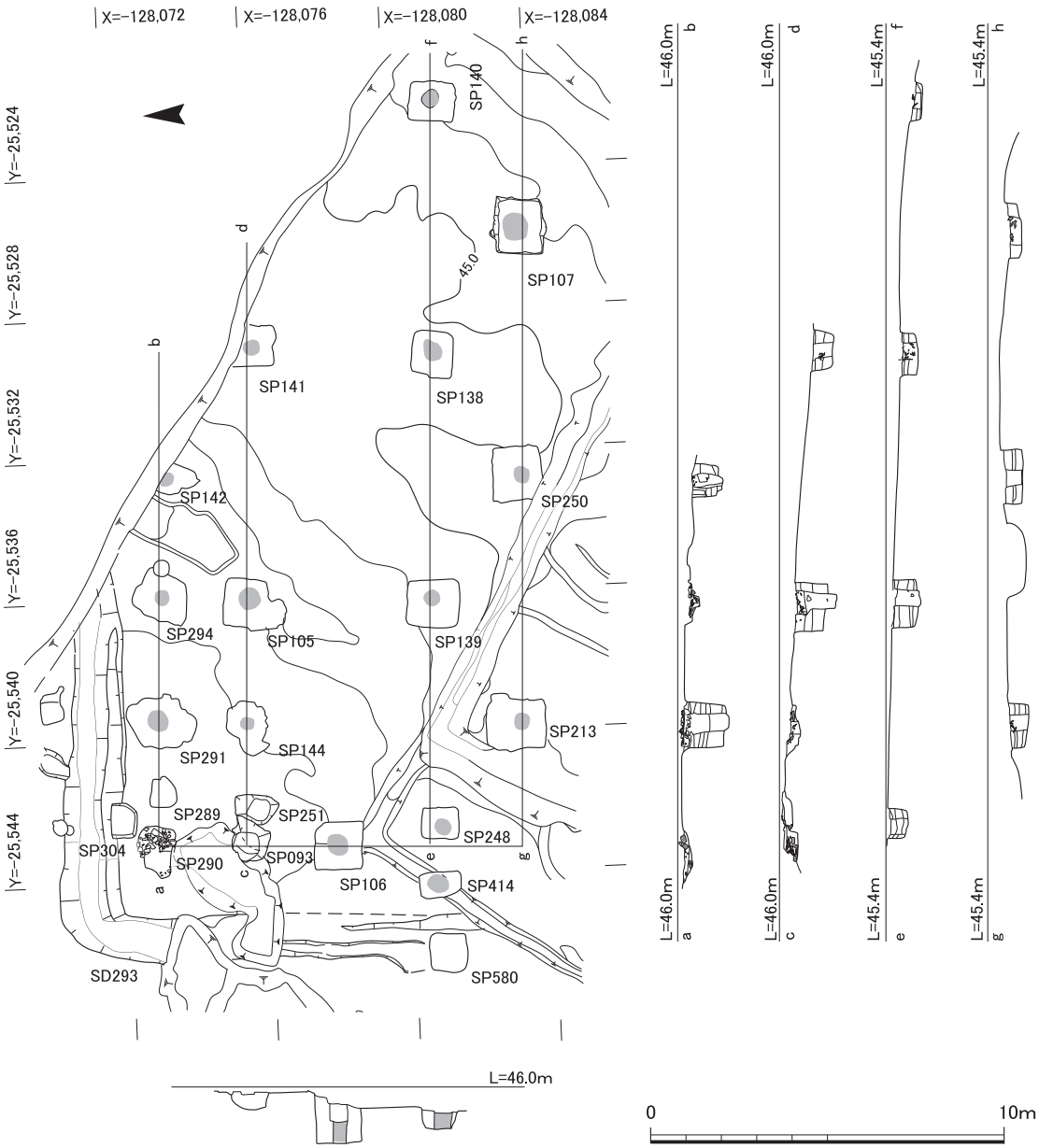
掘立柱建物ＳＢ2010･2013･2015･ＳＢ２　調査地の北部で検出した総柱建物です。個々の建物規模や構造が異なりますが、総柱建物は、一般に高床式の倉庫と考えられています。この付近に総柱建物が集中して営まれることから、古寺院が必要とする物資を収納した倉庫群が整備されていたと考えています(第10図の第Ⅱ群)。

掘立柱建物ＳＢ2009　調査地の西半部で検出した総柱建物です。規模は桁行３間(6.0m)、梁行２間(4.6m)で、大型の柱穴から構成されます。周辺にほかの建物が見られず、単独で立地する点などから、重要な仏具や教典を収めていた倉庫の可能性を考えています。総面積も27.6㎡と、先に紹介した倉庫群よりも1.5～２倍の広さを有します(第10図の第Ⅳ群)。

礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020　美濃山廃寺のほぼ中央部で検出しました。一辺1.0～1.4mほどの大型柱穴から構成され、桁行６間以上(21.2m以上)、梁行２間(5.1m)の身舎に、南北に庇がつく両面庇建物です。大型柱穴は、その検出状況から、柱を直接立てた深さ



第２図　美濃山廃寺主要遺構配置図(1/1,500)



第３図　礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020実測図(1/200)

1.3mほどの柱穴と、根石と推定される角礫を並べた深さ0.3m程度の柱穴とが交互に配置されていたと考えられます。後者は礎石を据えるための柱穴と推定されます。このようにＳＢ2020は掘立柱と礎石を交互に配置している点に建物としての特徴があります。ただし、このような構造を採用した建物の例は今のところ確認されていません。建物の性格ははっきりしませんが、建物の規模などから講堂の可能性もあると考えています。

また、ＳＢ2020の周囲から大量の瓦類が出土したことから、ＳＢ2020は瓦葺き建物であったと考えています。出土した軒丸瓦はⅢ型式(後述)が多く、これが葺かれていたと考えられます。一方、軒平瓦はまったく出土せず、ＳＢ2020に軒平瓦は使用されていなかった

と考えられます。

瓦溜りＳＸ208・21ほか　礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020の南側から溝ＳＤ６や美濃山１号窯の辺りにかけては大量の瓦類が出土しています。後世に撹乱された地点も多いのですが、瓦類がたくさん出土するいくつかのまとまりを検出しました。このことから遺構としては検出されなかったものの、大量の瓦が出土したことから、この辺りに金堂や塔などの寺院の中心部分があった可能性を考えています(以下では金堂相当施設と呼びます)。なお、ここから出土する軒丸瓦にはⅠ・Ⅱ型式が大半を占めますが、先の礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020周辺で出土したⅢ型式より古いものです。このほか、瓦溜りＳＸ208からは金箔の遺存した塼仏１点が出土しました。

鉄器生産関連遺構　調査地の南半部で検出しました。長さ14m、幅７ｍほどの範囲に、鍛冶炉５基、ひょうたん形土坑１基、横口式炭窯１基などを検出しました。鍛冶炉群の廃絶時期を示すと考えられる須恵器長頸壺の型式から鍛冶炉の操業時期は、美濃山廃寺の創建期に操業されたと考えています。

溶解炉ＳＬ１　調査地の南端で検出しました。出土遺物などから銅を溶解するための遺構と判断されます。操業後に破壊されているため、不明な点も多いのですが、南北0.75m、東西0.45mほどの範囲から焼土や炉壁が出土しました。また、溶解炉廃絶後の堆積層(落ち込みＳＸ20)から塼仏や鴟尾、ひさご形土製品などが出土しました。

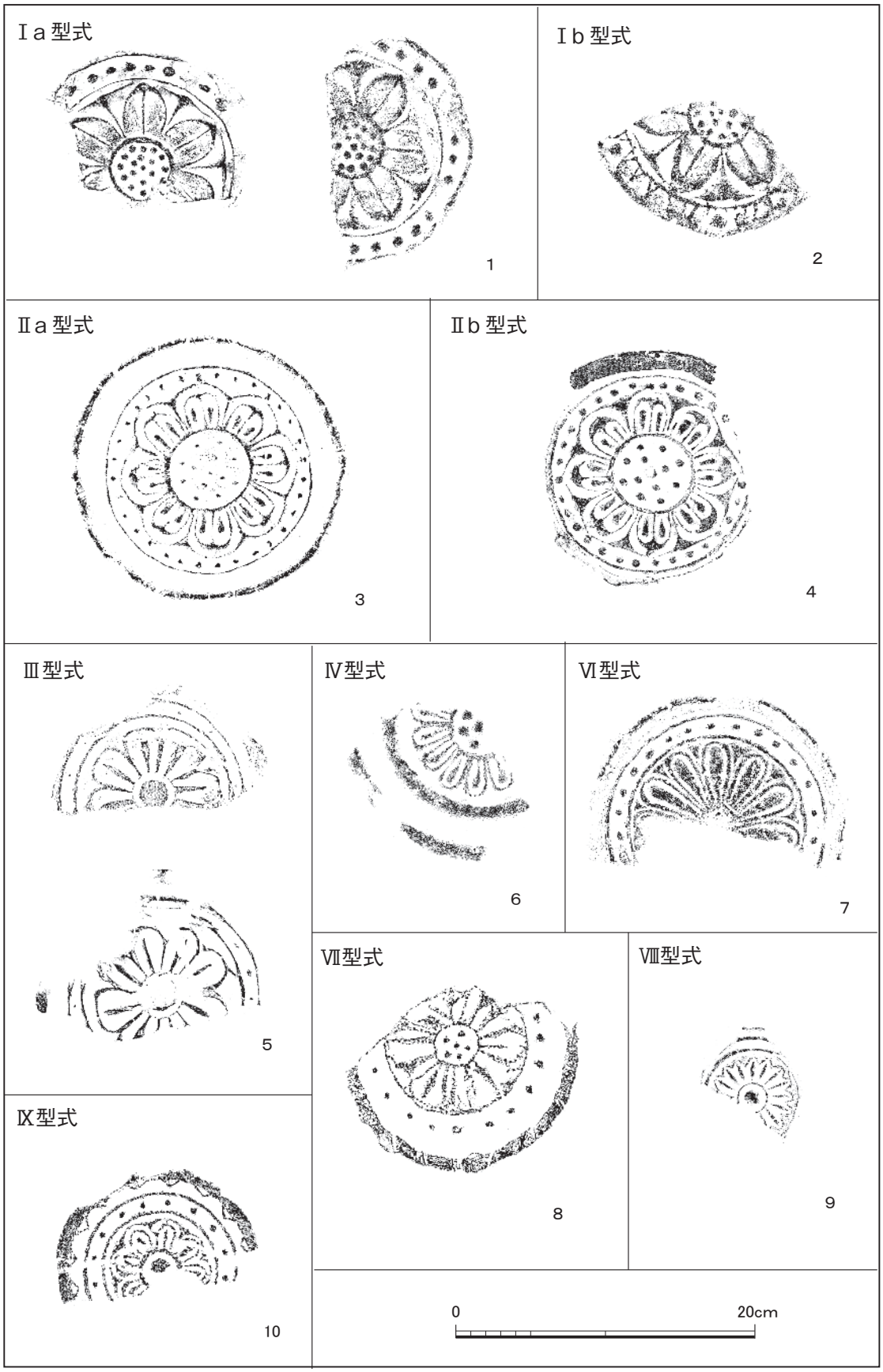
美濃山１号窯(ＳＸ17)　調査地の南端で検出しました。削平が著しく、一部のみが遺存していました。残存長は2.8m、残存幅は1.8mです。窯の構築材の一部に軒平瓦(Ⅰ型式)が転用されていました。また、灰原もすでに削平されたらしく、ごく一部を検出しただけです。出土遺物はあまり多くありませんが、美濃山廃寺の創建期に操業された窯跡と考えられます。

５.出土遺物の概要

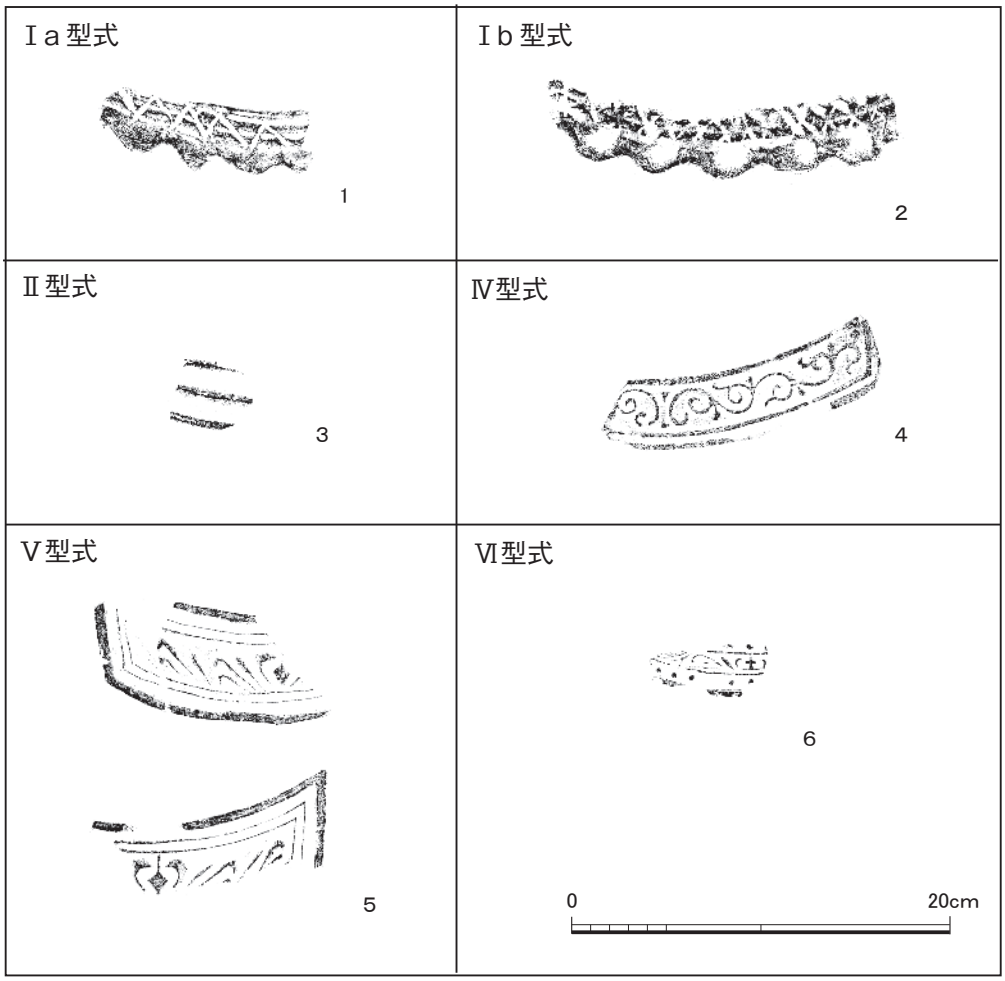
おもな出土遺物としては、瓦類(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鴟尾など)、土器類(土師器・須恵器・製塩土器・奈良三彩など)、仏具と思われる土製品(覆鉢形土製品・ひさご形土製品など)、塼仏、鉄器生産関連遺物、青銅器生産関連遺物などがあります。

瓦類(第４・５図)　出土遺物の大半を占め、総出土量は8,000kgを越えます。瓦を分類した結果、軒丸瓦10型式、軒平瓦６型式を確認しました。また、丸瓦・平瓦はそれぞれ２型式と５型式を確認しましたが、出土量が多くもっと細分できる可能性もあります。

軒丸瓦で主体となるのはⅠ～Ⅲ型式です。軒丸瓦Ⅰ型式は、新羅系の特徴を有するものであることがすでに指摘されており、同文のものが大阪府枚方市九頭神廃寺で出土しています。同廃寺の軒丸瓦は７世紀後半のものと考えられていますが、美濃山廃寺出土の軒丸



第４図　美濃山廃寺出土軒丸瓦分類図(1/4)



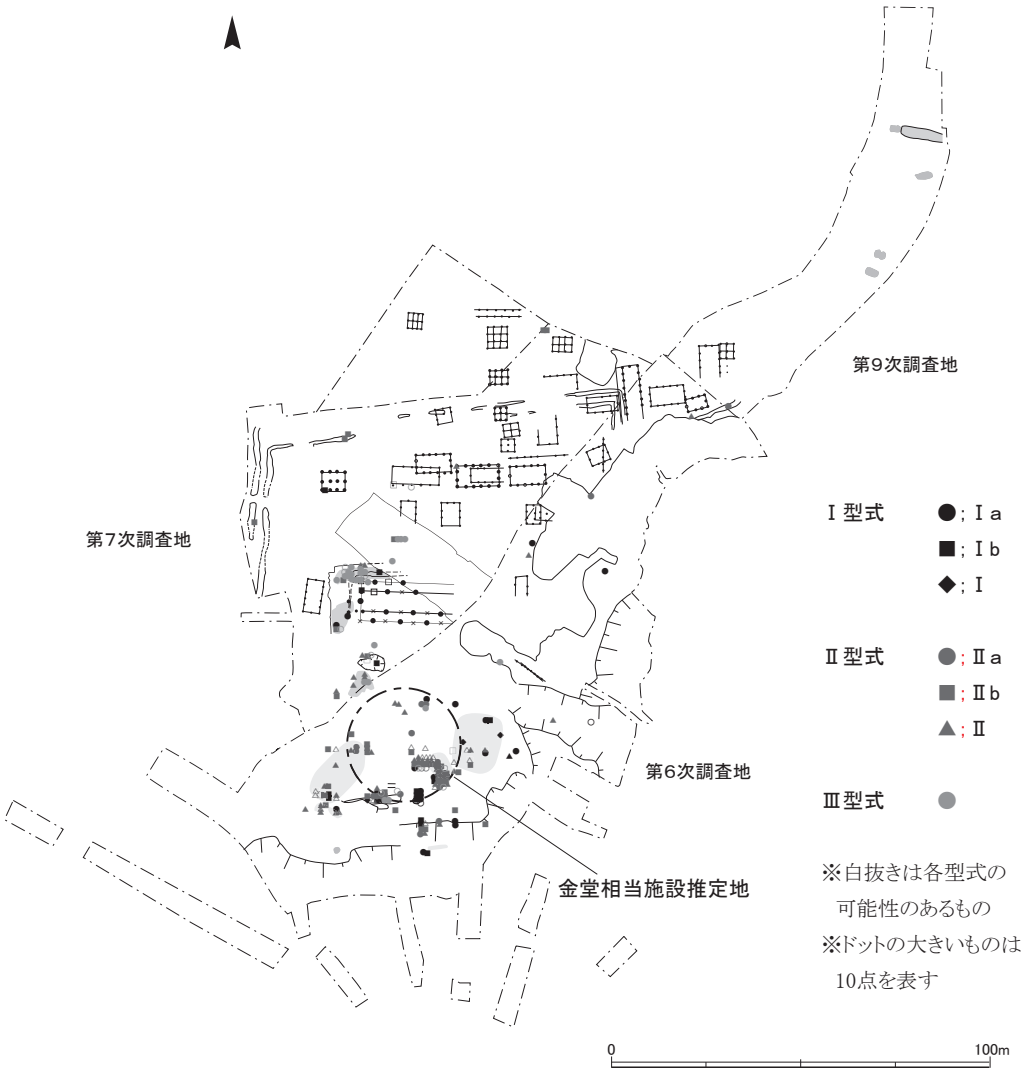
第５図　美濃山廃寺出土軒平瓦分類図(1/4)

瓦Ⅰ型式のものはもう少し新しく、７世紀末ないし８世紀初頭と考えられます。

軒丸瓦Ⅱ型式は、美濃山廃寺では最もたくさん出土した軒丸瓦ですが、同笵や同文のものは未確認です。ただし、類似した文様が藤原宮などで出土しておりその年代観などから８世紀初頭から前半にかけてのものと考えられます。

軒丸瓦Ⅲ型式は、礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020に使用された軒丸瓦です。８世紀後半ごろの平城宮(へいじょうきゅう)の軒丸瓦の影響を受けていると考えられることから、このころに位置づけられます。

軒丸瓦Ⅳ～Ⅸ型式は、軒丸瓦Ⅰ～Ⅲ型式にくらべると、出土点数が少ないものの、注目される軒丸瓦がいくつかあります。まず、軒丸瓦Ⅳ型式は枚方市百済寺跡(くだらでらあと)出土軒丸瓦の中に同文のものがあり、百済寺の創建(８世紀後半)以降のものと考えられます。同文のものが八幡市の西山廃寺(にしやまはいじ)でも出土しています。また、軒丸瓦Ⅶ型式は、山背国分寺(やましろこくぶんじ)(木津川市加茂町)の補修時に伴う軒丸瓦と同文です。美濃山廃寺や美濃山２号窯のほか、志水廃寺(八



第６図　美濃山廃寺出土軒丸瓦Ⅰ～Ⅲ型式分布図(1/2,000)

幡市)、興戸廃寺・普賢寺跡(京田辺市)などでも同文のものが出土しており、８世紀末ないし９世紀初頭の年代を与えることができます。

軒平瓦では、Ⅰ・Ⅱ型式が主体ですが、全体の出土量は少なく、軒丸瓦ほど使用されていなかったようです。また、Ⅲ～Ⅵ型式は出土点数が少なく、詳細は分かりません。特にⅣ・Ⅵ型式は美濃山２号窯から出土したものに限られ、美濃山廃寺では出土していません。ただし、軒平瓦Ⅳ型式は志水廃寺や山背国分寺で同笵や同文の軒平瓦が出土しています。

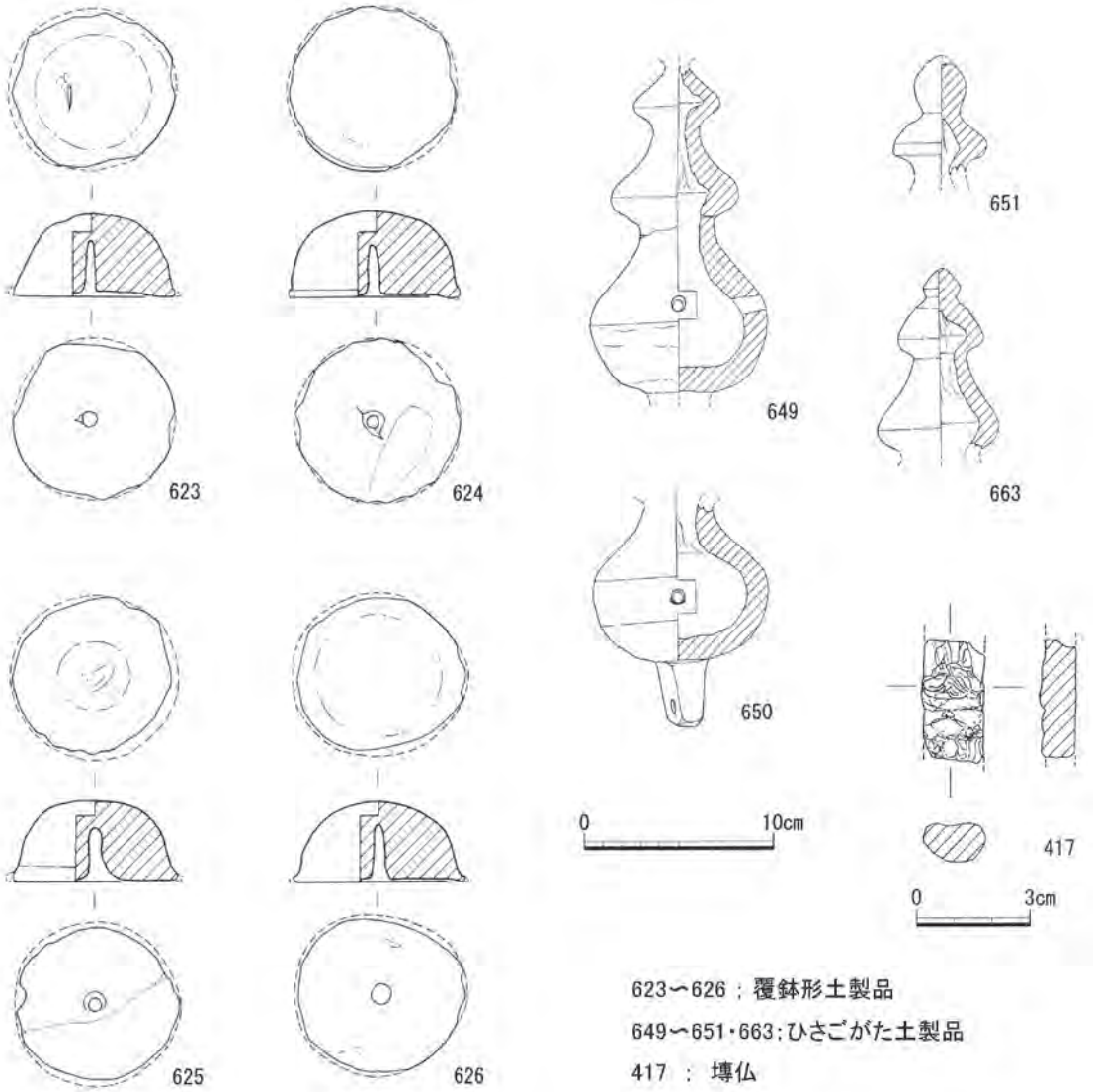
平瓦は大きく５型式に分けられますが、製作技法などからその変遷をうかがうことができます。平行タタキを持った古い特徴を持つもの(H-B類)はおもに、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式と出土することが多く、縄目タタキで１枚作りのような新しい特徴を持つもの(H-D類)は軒丸瓦Ⅲ型式と出土することが多いことが分かりました。このように軒丸瓦や平瓦の出土す

る場所や出土する瓦の組合せなどを見ていくことにより、美濃山廃寺の建物がどのような順序で建てられていったか、ということが分かりました(６節参照)。

丸瓦は大きく２型式に分かれ、特に古い特徴を持つ行基式という丸瓦(M-A類)が軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式と出土することが多いようです。

鴟尾(しび)は、金堂などの建物の屋根の大棟(おおむね)の両端につけられる飾りの一種です。出土した破片の点数はわずか５点ですが、落ち込みSX20や瓦溜りＳＸ21など、調査地南部に限って出土していることから、「金堂相当施設」に鴟尾を載せていた遺物が存在していた可能性があります。破片の特徴から７世紀後半ごろのものと考えられます。

土器類　たくさん出土する地点と出土しない地点の違いがはっきりしています。まず、土器の出土量が著しいのは６・７次調査区の北東部に当たる、溝ＳＤ039から区画溝ＳＤ001の北東角付近までの範囲です(第10図第Ⅲ群のあたり)。ここから出土している土器の多



第７図　美濃山廃寺出土土製品実測図(1/4・1/2)

くは８世紀前半～中ごろの年代を想定できます。これに対して中央部よりも南側では、土器がまとまって出土するところはほとんどなく、各建物の柱穴から少しずつ出土しているような状況です。出土した土器をみると、鉄器生産関連遺構や「金堂相当施設」推定地の周辺で７世紀後半～末のものが目立つほかは、広く８世紀全般におよぶ土器が出土しています。また、一部９世紀代にかかる土器も出土していいますが、それ以降の土器はほとんど確認できません。したがって、この頃に美濃山廃寺が廃絶したと考えています。

なお、礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020の周辺や土坑ＳＫ520からは奈良三彩の壺底部や体部片が出土しており、仏教儀式に用いられた可能性があります。また、「金堂相当施設」推定地の瓦溜りＳＸ21やＳＢ2020の周辺では、灯明痕を有する土師器の杯や椀などが多数出土しています。仏堂等への灯火が供えられていたのでしょう。

土製品（第７図）　覆鉢形土製品・ひさご形土製品・塼仏などがあります。

覆鉢形土製品は、半球形状で、底部の周を幅３～５mmほどの凸帯がめぐる土製品です。底部の中央に直径７～10mmほどの穴が穿たれています。過去の調査等も合わせて40点ほどが出土しています。類似したものは平安京周辺の法勝寺や鳥羽離宮跡などからも出土していますが、年代的には大きくかけ離れています。出土地点をみると、寺域の北西部で10点ほどが出土しているのを除くと、大半が金堂相当施設推定地の周辺、特に丘陵の南斜面と南東斜面に集中して出土しました。

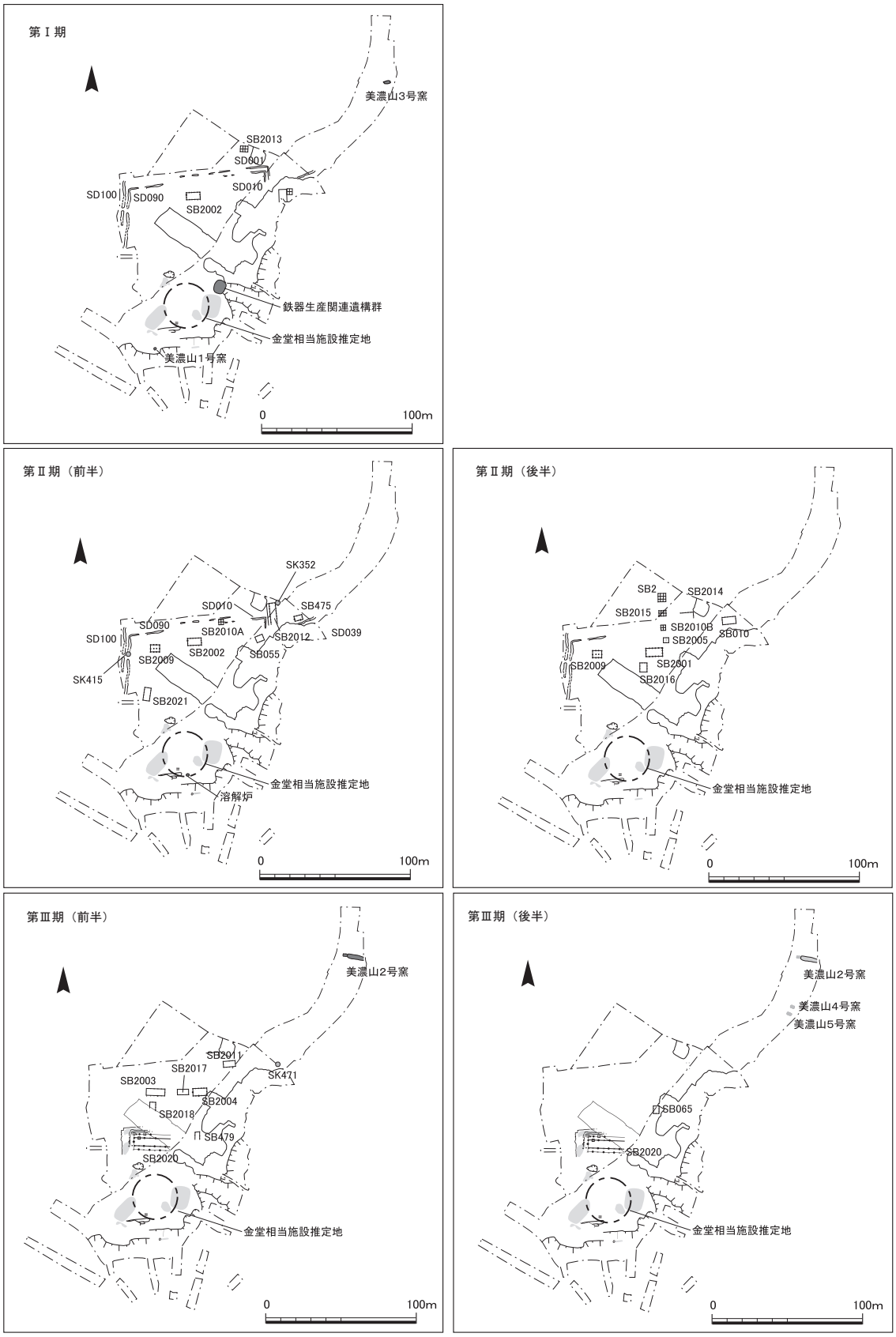
ひさご形土製品は、下部に他の製品と結合させるための突起をもつことから、塔の先端を表したものではないかと考えています。五重塔など先端に付く相輪のうち、宝珠と竜車の部分を「匏形（ひさごがた）」と呼んだという東大寺の古文献を参照して名付けました過去の調査も合わせて30点ほどが出土しています。これらも金堂相当施設推定地の周辺で多数が出土しています。

覆鉢形土製品とひさご形土製品については、後でもう一度触れることにします（７節参照）。

塼仏は３点出土しています。いずれも小さい破片ですが、１点は表面に金箔が残っていました。ところで、美濃山廃寺出土の塼仏は、型に粘土をつめて製作されています。同じ型から作られたものではないですが、形状が非常によく似た模様として枚方市百済寺跡出土の塼仏があります。百済寺跡とは同文の軒丸瓦が出土するなど、何らかのつながりがあると考えられます。

６.美濃山廃寺の変遷

美濃山廃寺で検出された遺構について、遺物の出土状況や掘立柱建物の方位などを考慮してその変遷について検討しました。その結果、大きく４時期に分けることができます（第

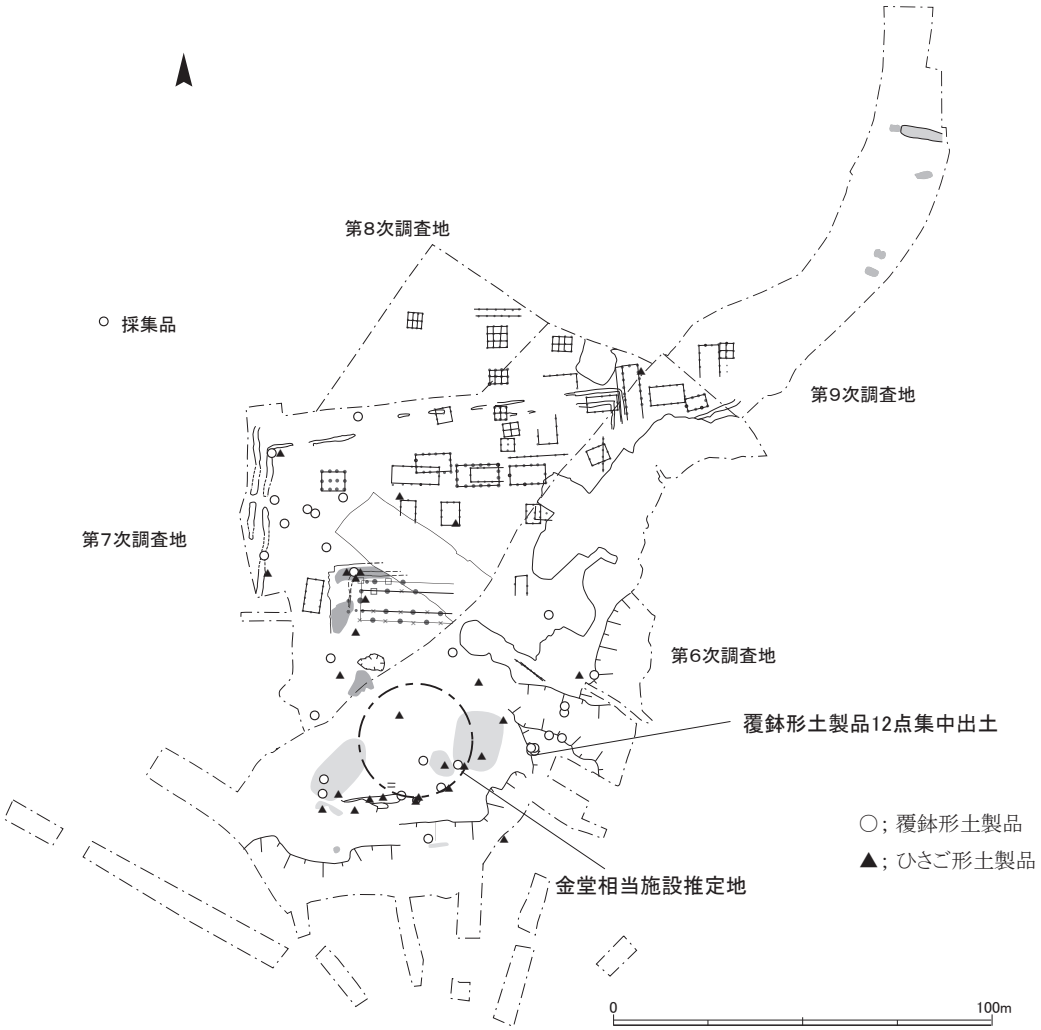


第８図　美濃山廃寺主要遺構変遷図

Ⅰ～Ⅳ期)。

第Ⅰ期(７世紀後半～８世紀はじめ)　区画溝や掘立柱建物ＳＢ2002・2013、鉄器生産関連遺構がこの時期に位置づけられます。また、遺構としては未確認ですが、金堂相当施設推定地とした付近にも何らかの建物の造営が行われた可能性は高いと考えています。したがって、第Ⅰ期を美濃山廃寺の「創建期」と考えています。この時期の瓦として、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式、丸瓦M-A類、平瓦H-B類が使用されたと考えられます。

第Ⅱ期(８世紀前半～中頃)　第Ⅱ期は出土した遺物などから前半と後半に分けることができます。前半に属する遺構としては、まず区画溝や掘立柱建物ＳＢ2002・2009・2012・055・475などがあります。ＳＢ2002は第Ⅰ期から引き続き存在したと考えています。また、土坑ＳＫ300・352・415、溶解炉ＳＬ１などがあります。ＳＫ300や415からは覆鉢形土製品が出土しました。溶解炉ＳＬ１の廃棄後の落ち込みＳＸ20からはひさご形土製品も出土しています。後半に属する遺構としては掘立柱建物ＳＢ2001・2009・2015・2016・２・10な



第９図　覆鉢形土製品・ひさご形土製品出土分布図(1/2,000)

どがあります。後半には区画溝のうち少なくとも北東部については埋められていた可能性があります。

これらの掘立柱建物の多くは、寺院の中心部分である「伽藍(=仏地)」ではなく、僧尼の居住空間や寺務空間、倉庫群などの、いわゆる「寺院付属施設(=僧地)」に位置づけられると考えています。そして、これらの諸施設は区画溝を越えて北方に展開することもわかりました。したがって、第Ⅱ期を美濃山廃寺の「整備期」と考えています。遺物の上では、美濃山廃寺を特徴づけるひさご形土製品や覆鉢形土製品の多くが第２期前半に廃棄されています。したがって、第Ⅱ期にこれらの遺物を使用した仏教儀式が行われていたと考えています。

第Ⅲ期(８世紀後半～９世紀初頭)　礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020が造営され、屋根瓦の補修が行われていたと考える時期です。ＳＢ2020は南側に位置する金堂相当施設推定地の真北に当たることから講堂の可能性があります。このＳＢ2020の造営時に伴う軒丸瓦がⅢ型式で、補修時の軒丸瓦がⅧ型式のものです。金堂相当施設推定地についても、８世紀末ないし９世紀初頭と推定される軒丸瓦Ⅶ型式のものが出土していることから、このころまで屋根瓦の補修が行われていた可能性があります。掘立柱建物ＳＢ2003・2004・2018、土坑ＳＫ471はこの時期のものと考えますが、その数は第２期にくらべると少なくなっており、ＳＢ2020を造営して寺観(寺院としての景観)を整えたものの、全体の傾向は衰退に向かっていった「衰退期」と考えています。

第Ⅳ期(９世紀代)　この頃の遺物を最後に美濃山廃寺では遺物が出土しなくなります。このことからこの頃に美濃山廃寺は廃絶したのではないかと考えます。詳細な原因は不明ですが、この段階を「廃絶期」と考えています。

７.美濃山廃寺と出土土製品

美濃山廃寺で出土した土製品のうち、覆鉢形土製品は美濃山廃寺よりもずっと新しい平安時代後期以降に類例が認められますが、ひさご形土製品は、今のところ国内で唯一の出土例となっています。

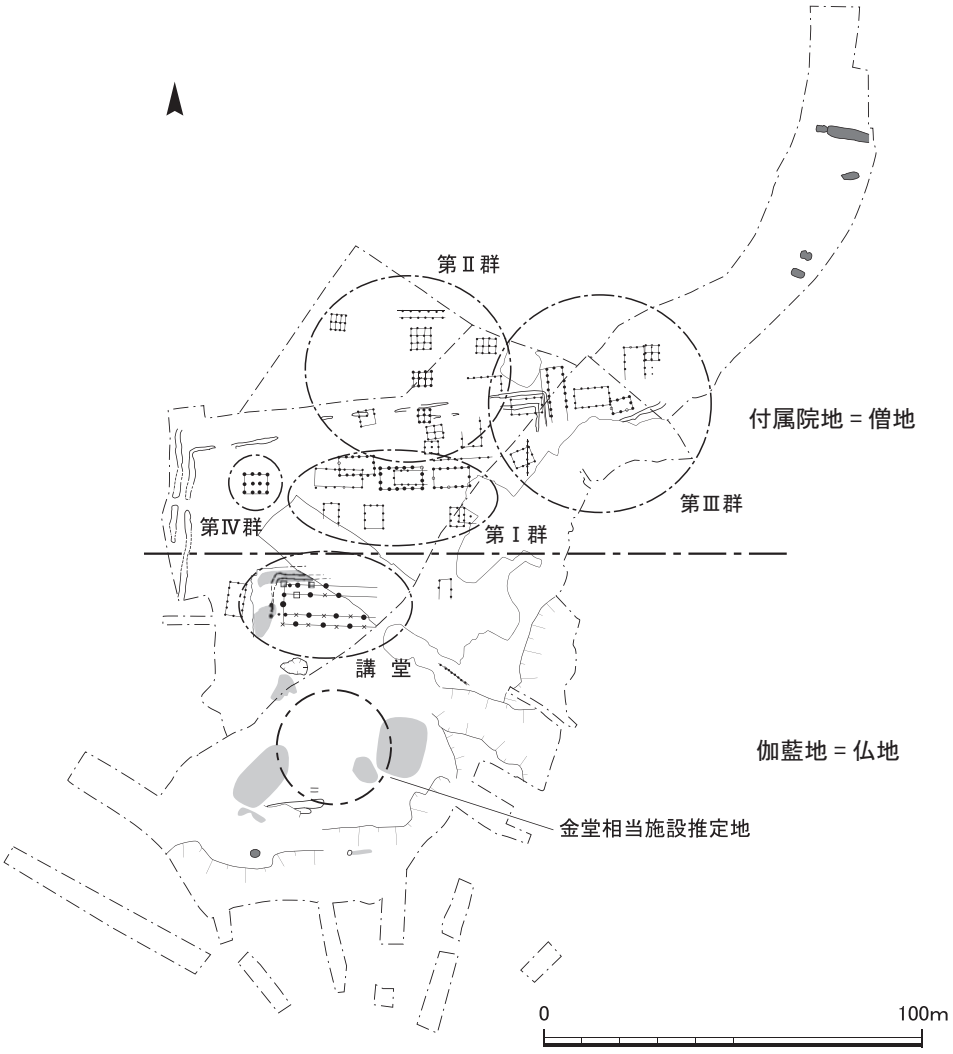
両土製品は、ともに塔ないし塔の一部を表していると考えられ、小さな塔を多数作ることで功徳が得られる小塔供養に用いられたと考えられます。両製品とも多数の点数が出土していることから、こうした小塔供養が美濃山廃寺で行われていたことを示しています。

これまで日本での小塔供養の初例は、奈良時代後半の称徳天皇による百万塔の製作とされ、また流行するのは平安時代後期以降と考えられてきました。しかし、美濃山廃寺で出土した覆鉢形土製品やひさご形土製品に伴う遺物をみると、称徳天皇の奈良時代後半からもう少し遡って奈良時代前半には、こうした小塔供養を行っていた可能性が高まりまし

た。小塔供養の例としては最も古い例の１つとなると考えています。

それではこうした小塔供養の由来をどのように考えたらよいのでしょうか。小塔供養の実践に当たっては「無垢浄光大陀羅尼経（むくじょうきょうだいだらにきょう）」という教典にもとづいて行うのですが、これが中国で漢訳（かんやく）されたのは８世紀初頭で、時を経ずに朝鮮半島の新羅まで伝わっています。この新羅まで伝わった「無垢浄光大陀羅尼経」がさらに日本に伝わったと考えれば、奈良時代前半に美濃山廃寺で「無垢浄光大陀羅尼経」にもとづいた小塔供養が行われていても不思議ではありません。ただし、こうした考え方はあくまでも可能性でしかありません。今後さらなる検討が必要だと思います

なお、両土製品の出土地点が金堂相当施設周辺に集中していることから、ここに想定される建物において、両土製品が保管、もしくは使用されたと考えています。



第10図　美濃山廃寺寺院内建物群想定復元図（1/2,000）

８.美濃山廃寺の景観

美濃山廃寺の調査では、礎石・掘立柱併用建物とともに、多数の掘立柱建物を検出しました。また、寺域の区画溝を確認するとともに、出土した瓦の分析から金堂相当施設の存在を想定しました。今回の調査では、これらの建物の機能や性格を表すような文字資料(木簡や墨書土器など)は出土していませんが、個々の遺構群の立地などから美濃山廃寺の景観について、簡単な復元を試みたいと思います。

古代の寺院に限りませんが、寺院の構成は、仏舎利をおさめた塔や本尊を安置した金堂など、仏像等の礼拝空間(=伽藍地、上原真人氏は「仏地」と呼ぶ)と、僧尼が日常生活を送ったり、寺院の維持管理を行ったりする空間(=付属院地、上原真人氏は「僧地」と呼ぶ)に大きく分けて理解することができます。美濃山廃寺で確認した多数の掘立柱建物等もこのような意味付けができると考えます。

美濃山廃寺における建物配置等をまとめると、第10図のようになると思います。

まず「仏地」からみていくと、南側に瓦の出土状況から想定した金堂相当施設推定地があります。この付近に金堂と塔があったのか、金堂のみであったのかは明らかにできませんでした。この北側に礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020があり、講堂に相当するのではないかと考えられます。本来、金堂や講堂の周辺にはこれらを取り囲む回廊がめぐることが多い(この内側が「伽藍地」もしくは「仏地」ということになります)のですが、美濃山廃寺では確認できませんでした。

次に「僧地」ですが、見つかっている建物群は大きく４つのグループに分けることができます(第Ⅰ～Ⅳ群)。まず、第Ⅰ群は、ＳＢ2001・2002・2004などの大型の掘立柱建物が見つかっていますが、同時に存在したのではなく、建て替えられたものと考えています。検出遺構の概要で述べたしたように、美濃山廃寺の寺務を運営する施設があったと考えています。第Ⅱ群は、第Ⅰ群の北側に広がる総柱建物群で、寺院に必要な物資を納めた倉庫群と想定されます。第Ⅲ群は第Ⅱ群の東側に位置しますが、建物の柱穴や周辺の溝・土坑などから多数の土器が出土することから、僧尼の生活空間があったのではないかと考えています。出土土器に奈良時代はじめから後半までのものが確認できることから、美濃山廃寺の創建から廃絶まで、一貫して生活空間として使用されていたと考えます。第Ⅳ群は第Ⅰ群の西側に位置する大型の総柱建物１棟のみからなります。類例などから、重要な仏具や教典を収めていた宝蔵や経蔵の可能性があります。

ここまで述べてきた掘立柱建物の機能や性格は、あくまでも１つの案です。美濃山廃寺のように文献に記録されていない寺院の場合、こうした発掘調査を通じて当時の寺院の景観を復元することも、古代寺院の研究にとっては重要なことです。

9.おわりに

一連の調査の結果、後世の土地利用などによって失われた中心となるべき金堂や塔の実態を明らかにすることはできませんでした。しかし、出土した瓦類の分析等から金堂等の位置を推定することができました。また、礎石と掘立柱を併用した建物を検出し、さらに多数の掘立柱建物を検出することによって、美濃山廃寺の寺院としての景観・変遷を明らかにすることができたのではないかと考えています。

多数の遺物が出土しましたが、中でも注目されるものとして、覆鉢形土製品とひさご形土製品があります。すでに指摘したように、これらの遺物は小塔供養に用いられたものと考えています。従来、小塔供養の開始は早くとも奈良時代後半の百万塔からと考えられていましたが、美濃山廃寺の出土例はそれをさかのぼる可能性があります。もし、そうだとすれば、日本で最も早く小塔供養を行った例になると考えられます。その由来は、今後さらなる研究を進める必要がありますが、当時、朝鮮半島の新羅ではすでに小塔供養が盛んに行われていたようですから、かの地に求めることもできるかもしれません。

最後に美濃山廃寺を造営した氏族(しぞく)について触れたいと思います。発掘調査の結果からいえば、美濃山廃寺の造営氏族(ぞうえいしぞく)の名前を明らかにすることができませんでした。しかし、創建段階の軒丸瓦Ⅰ型式や小塔供養など、新羅をはじめとする渡来系(とらいけい)の影響を受けた文物が認められることは注目されます。これらのことだけで、美濃山廃寺の造営氏族を渡来系氏族(とらいけいしぞく)というのは早計ですが、美濃山廃寺の造営や運営に渡来系氏族が関わっていた可能性は否定できないと思います。

美濃山廃寺のほぼ全域について発掘調査を実施しましたが、これによって美濃山廃寺の全容が明らかになったかと言うよりは、むしろ謎が深まったというべきかもしれません。美濃山廃寺については、まだまだ多くの課題が残されていますが、周辺地域での調査の進展や類例の増加を期待しつつ、今後とも研究を続けていく必要があると思います。

京埋セミナー資料 No.124 － 380

美濃山瓦窯跡（みのやまがようあと）の成立と展開

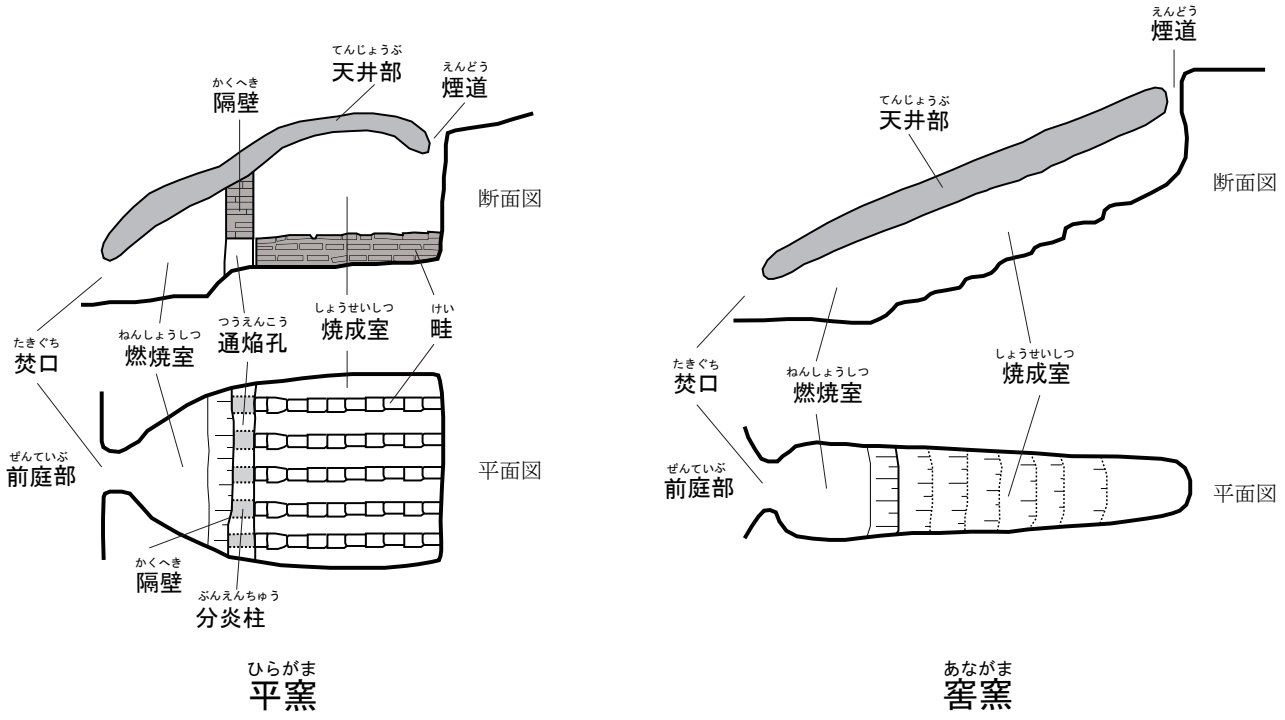
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
主任調査員　引原茂治

1．はじめに

調査地は、八幡市美濃山古寺に所在し、八幡市の南部、京田辺市との境近くの丘陵部に位置します（第１図）。１号窯は美濃山廃寺の南側に、２～５号窯は美濃山廃寺北東側の丘陵東側斜面地に築窯されています。５基の瓦窯が見つかっており、これらを「美濃山瓦窯跡」と呼んでいます（第２図）。

第１図　調査地位置図

第２図　窯跡分布図



第３図　窯の構造図

２.確認した瓦窯について

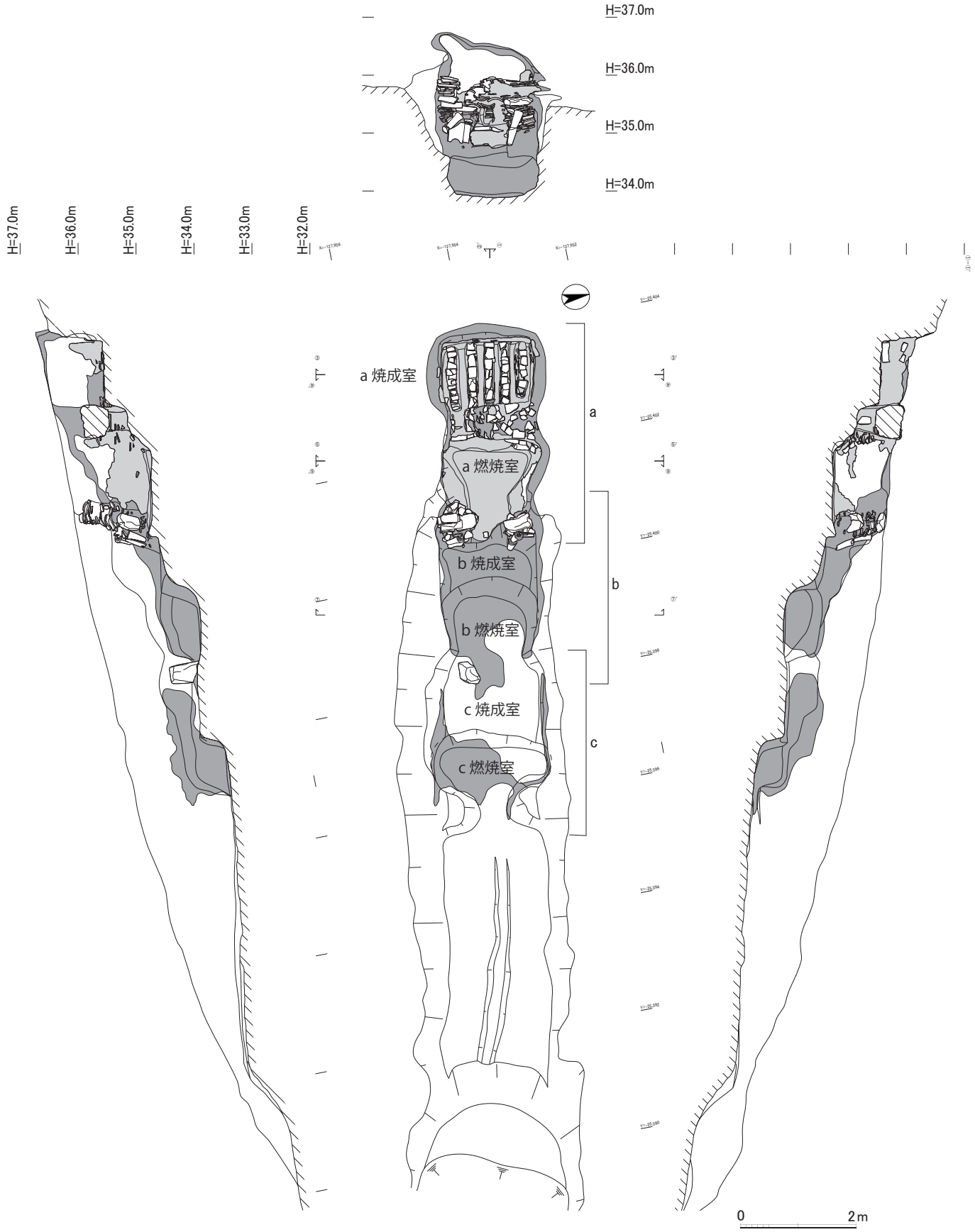
１号窯は、窖窯で、燃焼部のみが残存していました。美濃山廃寺創建期の軒平瓦が出土しています。７世紀後半～８世紀初め頃の窯とみられます。

２号窯は、全長 13 ｍの窯跡です。この窯では、平窯が２回造り替えられていることが判りました。新しい窯を造り替えるごとに前の窯の奥壁部を壊して掘り進めています。最後に造られた３基目の平窯は、瓦を焼く焼成室、薪を燃やす燃焼室、作業スペースの前庭部が良く残っています。内部からは瓦が多数出土しました。操業時期は、美濃山廃寺の調査成果などから、８世紀後半頃と考えられます（第４図）。

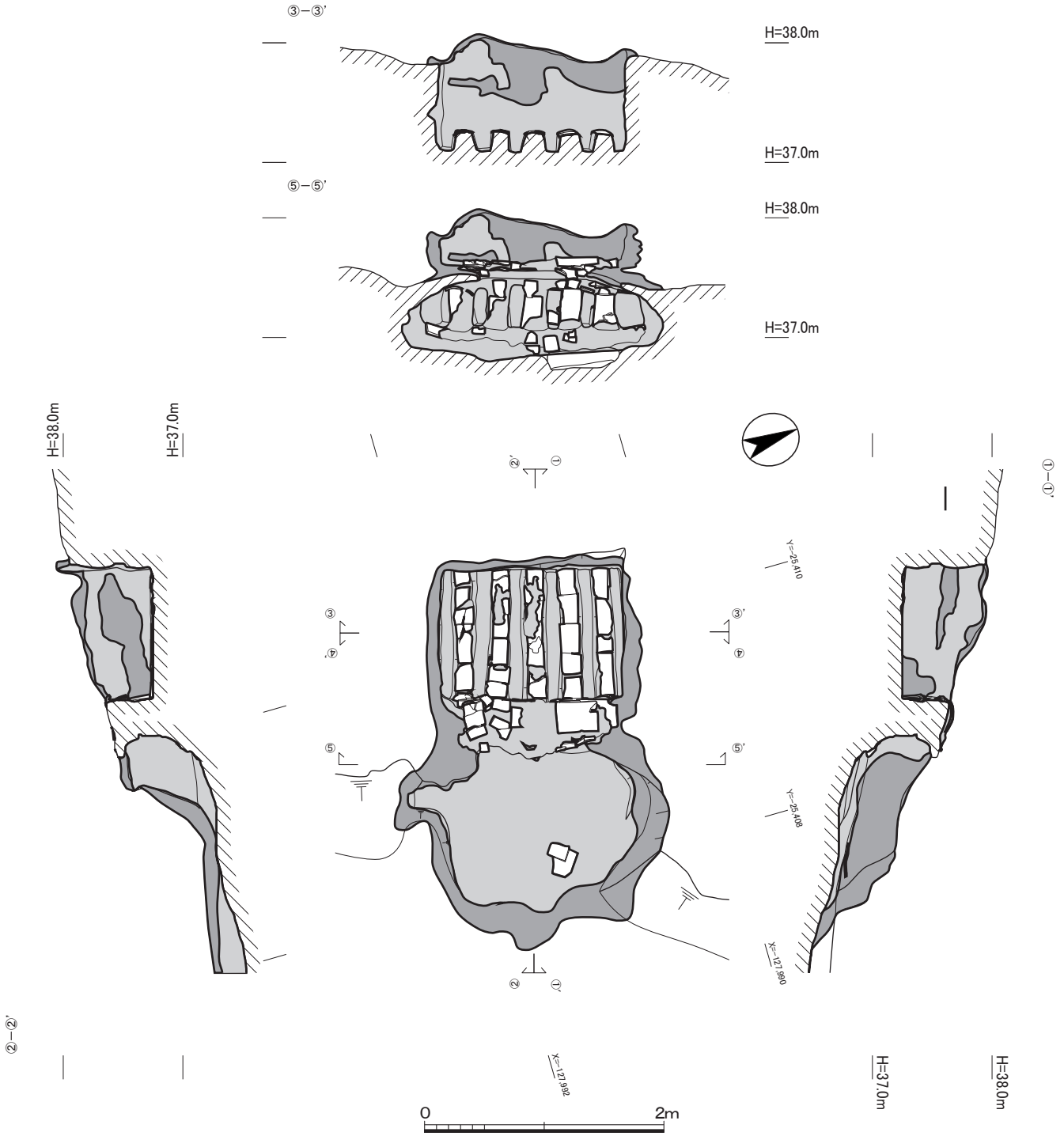
３号窯は、窖窯で、天井部をスサ入り粘土で構築した半地下式窖窯とみられます。近世に削平されたため、焼成室の下半部と燃焼室、そして焚口、前庭部のみが残っています。焼成室の床面は、瓦を置くために低い階段状になります。窯体内からは平瓦片が出土しました。平瓦は、凸面を平行タタキする一群と平行タタキと縄タタキを併用する一群があります。時期は８世紀初頭～前半と考えられます。

４号窯は有畦式平窯で、焼成室が部分的に残るのみです。窯の壁面は、粘土と瓦を塗り込め、補修しています。窯の内部から縄タタキの平瓦や肩部に縦耳を付す須恵器の壺片が出土しました。出土した須恵器から、９世紀頃に操業したものと考えられます（第５図）。

５号窯は、４号窯と同様の有畦式平窯で、焼成室と燃焼室が残っています。燃焼室には、天井部の一部が残っています。焼成室内からは、縄タタキの平瓦や須恵器の甕などが出土


H=37.0m
H=36.0m
H=35.0m
H=34.0m
H=37.0m
H=36.0m
H=35.0m
H=34.0m
H=33.0m
H=32.0m
a 焼成室
a 燃焼室
b 焼成室
b 燃焼室
c 焼成室
c 燃焼室
a
b
c
0
2m

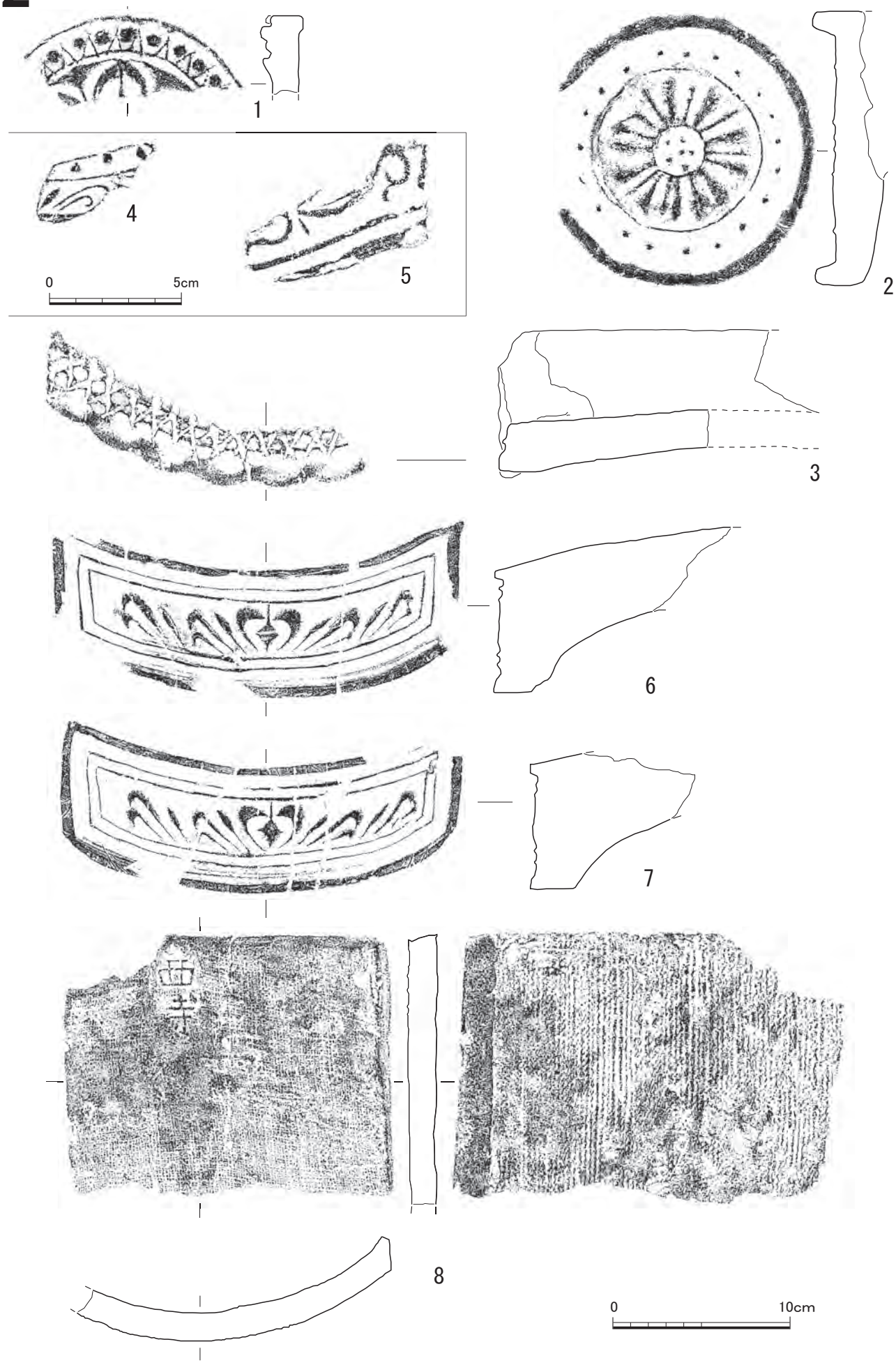
第４図　２号窯実測図



第５図　５号窯実測図

しました。構造や立地から、４号窯と同じく９世紀頃に操業したと考えられます。

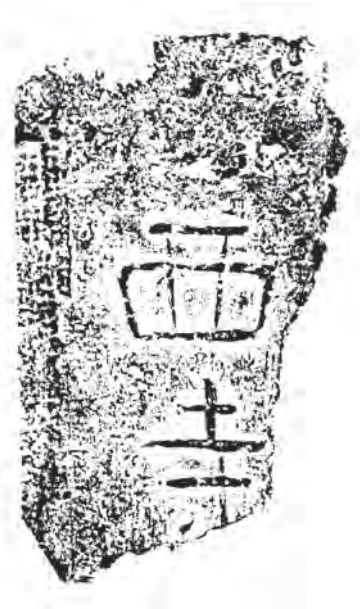
この時代の平窯は、２基がセットとなり操業されたと考えられることから、４・５号窯は常に瓦を生産できる体制を維持するために交互に操業していた可能性もあります。



第６図　出土瓦実測図

表　瓦窯一覧表

	窯の形式	残存長	幅	出土瓦
２号窯	平窯（c）	13m	1.5m	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦（平行タタキ、平行+縄タタキ、縄タタキ）
	平窯（b）		1.6m	
	平窯（a）		1.6m	
３号窯	窖窯	4.4m	1.5m	平瓦（平行タタキ、平行+縄タタキ）・丸瓦
４号窯	平窯	2.9m	1.7m	平瓦（縄タタキ）・丸瓦
５号窯	平窯	3.1m	1.6m	平瓦（縄タタキ）・丸瓦



第７図 「西寺」押印瓦拓影
（平安京西寺跡出土）

写真「西寺」押印瓦
（美濃山廃寺４号窯出土）

３.出土した瓦

２～５号窯では整理箱215箱の瓦や土器が出土しています。第６図に示した軒瓦（のきがわら）１～７は、２号窯から出土しました。

軒丸瓦（のきまるがわら）１は、美濃山廃寺の創建瓦（そうけんがわら）と同文（どうもん）であり、美濃山廃寺Ｉｂ型式の軒丸瓦です。枚方市九頭神廃寺（くずがみはいじ）からも同文の軒丸瓦が出土しています。軒丸瓦２は、八幡市志水廃寺（しみずはいじ）出土のものと同笵瓦（どうはんがわら）で、美濃山廃寺Ⅶ型式の軒丸瓦です。２－ａ号窯の埋土から出土しました。

軒平瓦３は、美濃山廃寺の創建瓦と同文であり、美濃山廃寺Ｉｂ型式の軒平瓦です。畦（あぜ）の構築材として出土しました。１号窯から同文の瓦が出土しています。軒平瓦４は、型式

不明です。軒平瓦５は、八幡市志水廃寺出土の軒平瓦と同笵とみられる瓦で、美濃山廃寺Ⅳ型式です。軒平瓦６・７は２－ｂ号窯の前庭部から出土しました。美濃山廃寺では出土していませんが、軒平瓦Ⅴ型式です。

押印瓦８は、４号窯畦の構築材として出土しました。熨斗瓦として焼成されたものとみられます。凹面に「西寺」の押印があります。京都市西寺跡から出土した瓦片に同様の押印をもつものがあることが判りました。1970年に平安博物館によって実施された京都市立唐橋小学校のプール建設に伴う調査で出土したものです。西寺の南東隅部にあった灌頂院の北築地部分にあたります。このことから、今回出土した押印瓦は西寺の造営のために焼成されたものと考えられます。

４.まとめ

美濃山瓦窯跡群の中で、窖窯である１号窯は今回調査した窯では最古の瓦窯です。美濃山廃寺創建期の瓦を焼成したとみられ、第Ⅰ期に属する窯跡と考えられます。

半地下式の窖窯である３号窯は、美濃山廃寺の整備期の瓦を焼成した窯とみられます。第Ⅱ期に属する窯跡と考えられます。

有畦式平窯の２号窯は、美濃山廃寺のⅧ形式の軒丸瓦を焼成した窯とみられます。また、２号窯で焼成されたと考えられる軒平瓦・軒丸瓦の中には、八幡市志水廃寺出土のものと同笵の瓦があります。このことは、瓦の供給先が、美濃山廃寺だけでなく近隣地域に拡大していくことを示すと考えられます。美濃山廃寺の第Ⅲ期に属する窯とみられます。

４・５号窯は、有畦式平窯で、美濃山廃寺の第Ⅳ期の窯と考えられます。この時期は美濃山廃寺の廃絶期であり、瓦の供給をあまり必要としなくなる時期でもあります。

上記のとおり、４号窯から「西寺」の押印を持つ瓦が出土しています。この瓦は、窯の構築材として出土しており、４号窯で焼成されたものかどうかは明確ではありません。しかし、付近で瓦片などは容易に入手できる環境であり、別の場所から持ってきたとも考えにくい状況です。また、焼成部から出土した瓦や壁面の修理瓦と調整や胎土が似ており、４号窯もしくは隣接する５号窯で焼成された可能性が高いと考えられます。

２号窯の段階で周辺地域に瓦供給を行うようになった美濃山瓦窯が、４・５号窯の段階で官寺である西寺の瓦を焼成するようになったと考えられます。このことは、地方の寺院に属していた瓦窯が、最終的に国家の瓦生産の一端を担うようになったことを示すとみられます。

美濃山瓦窯から西側約５kmの大阪府枚方市坂瓦窯や九頭神廃寺でも西寺関係の押印瓦が出土しています。字体などから、美濃山瓦窯出土瓦の印とは異なっています。初期の美

濃山瓦窯の供給先であった美濃山廃寺は、九頭神廃寺などの北河内地域との係わりが深いことが指摘されています。西寺造営にあたって、このような地域的な係わりのなかで八幡市域や北河内地域に所在する瓦窯が瓦生産の一端を担うようになったと考えられます。

西寺は、平安京の中央を南北に延びる朱雀大路をはさんで東寺と対象の位置に建立された官寺です。平安遷都（794 年）直後から造営が開始され弘仁 14（823）年頃までには完成していたと考えられています。東寺とともに、国家が造営した寺として、壮麗な寺観を誇っていました。その後、東寺は空海に下賜され、真言密教の寺として繁栄し、火災で焼失しても再建を繰り返し、現在まで続いています。西寺は国家が寺院経営を続けましたが、律令体制が崩壊していくにつれて次第に衰退し、鎌倉時代の天福元（1233）年に焼失して以後、再建されることはなかったようです。現在、西寺跡には講堂基壇跡が残り、付近は西寺公園となっています。また、国指定史跡になっています。

メ　モ

京埋セミナー資料 No.124 － 381

美濃山廃寺（みのやまはいじ）の歴史的位置づけ

－地域社会と美濃山廃寺－

八幡市教育委員会　文化財保護課
主幹　小森俊寛

１．はじめに

美濃山廃寺（みのやまはいじ）は、八幡に３つある古代寺院のうち唯一開発を免れ、竹林の中にあった遺跡ですが、周辺の開発の進行に伴い、八幡市教育委員会が平成 11 年～同 15 年にかけて遺跡の範囲確認調査を行いました。その結果、広大な竹林の中、寺院の区画溝を検出し、寺院の範囲をほぼ特定することができました。

平成 23 年９月から同 24 年３月にかけて実施した美濃山廃寺及び同下層遺跡の発掘調査は、開発行為に対応する形での行政レベルの緊急的発掘調査では類例をあまり見ない、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター（以下府埋文センターと略す）と八幡市教育委員会の２つの組織で分担を決め、隣接して同時に実施することになりました。丘陵上の寺域（じいき）主要部は、第７次調査として府埋文センターが、寺域北西部を第８次調査として八幡市教育委員会が担当し、調査を実施しました。また平成 23 年中には、すでに報告があったように、寺域南東部を含む隣接地を第６次調査として、その北側の廃寺北東部辺を含む地域を第９次調査として府埋文センターが調査を行いました。

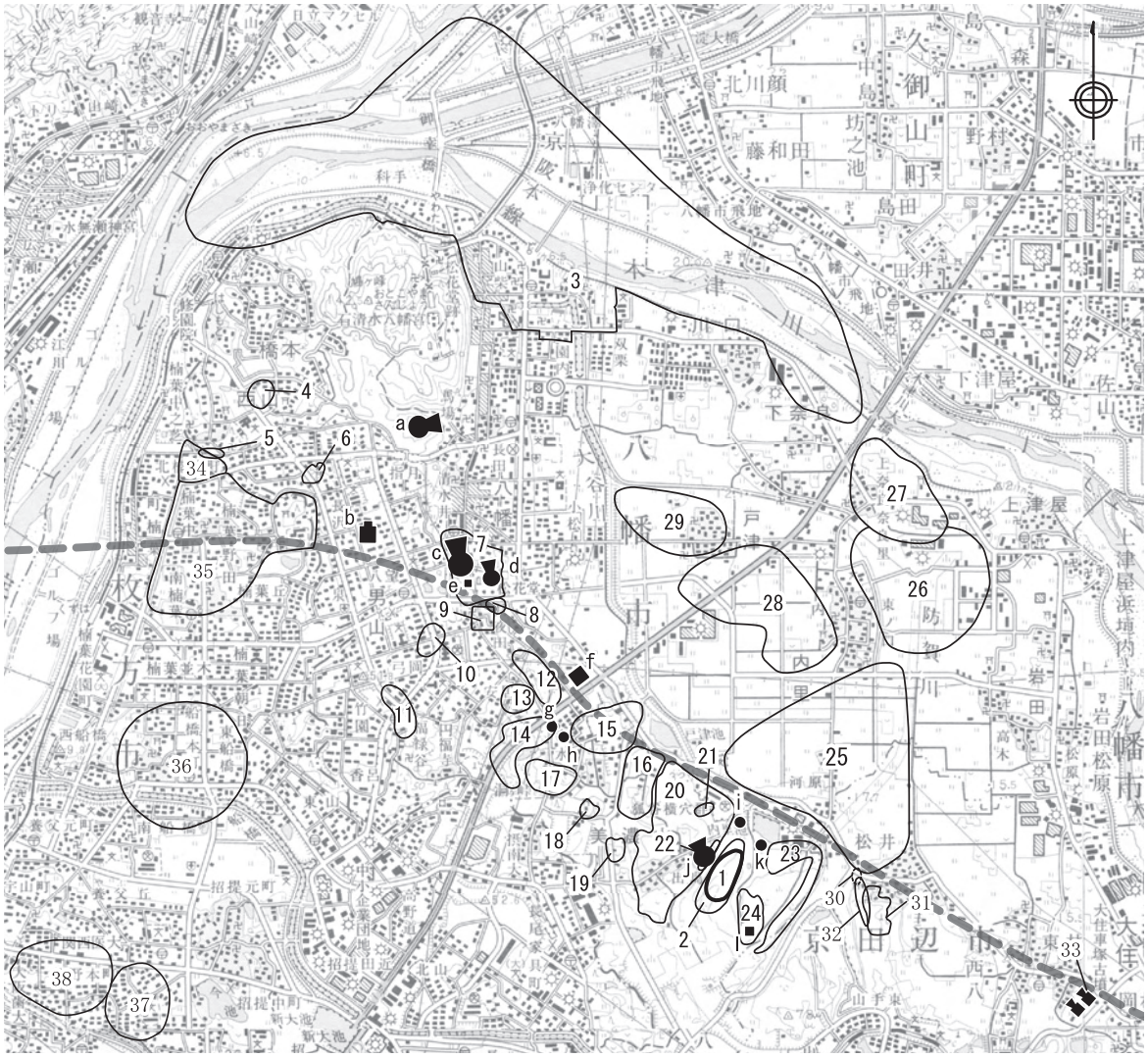
このような経緯を経た結果、調査報告書もそれぞれの分担分の出土資料を手分けして整理・研究を行い、個々で報告書をまとめて公開することとなり、平成 25 年の３月には、それぞれの報告書を刊行しています。ここではそれらの成果を踏まえた遺跡全体の歴史的評価を、八幡市側の報告書に掲載した「総括」の章の内容をもとに作成した資料を提示し、話しを進めていきたいと思っています。

２．寺院のあり方と変遷

古代の寺院というと、奈良の法隆寺（ほうりゅうじ）や大阪の四天王寺（してんのうじ）など、平地に四角い伽藍（がらん）で造られ

た寺院が多くありますが、京都の延暦寺のように、平安時代前期になると高い山の上に造られる寺院が多く見られるようになります。美濃山廃寺は、これまでの報告でも明らかなように、低地との比高差30ｍ程の低丘陵上に造られていますが、地形に則せず方位を意識して建物を配置しており、寺域南部に伽藍を構成する建物が配置されたと見られることから、寺院は南面し南に門が開いていたものと推測されます。

今回調査の南部で検出された生産施設、１号窯と鍛冶炉・溶解炉は、寺院入口に近い寺域の南東部に位置しており、鍛冶炉区西側の空閑地にあった基壇を伴うと見られる中心建物の建設中に機能したもので、完成後にはその役割を終えていたと考えるのが自然でしょ



1. 美濃山廃寺 2. 美濃山廃寺下層遺跡 3. 木津川河床遺跡 4. 石ケ谷遺跡 5. 楠葉平野山窯跡 6. 西山廃寺（足立寺）7. 女郎花遺跡
8. 月夜田遺跡 9. 志水廃寺 10. 中ノ山遺跡 11. 幣原遺跡 12. 山田遺跡 13. 南山遺跡 14. 備前遺跡 15. 幸水遺跡 16. 金右衛門垣内遺跡
17. 西ノ口遺跡 18. 宮ノ背遺跡 19. 宮ノ背西遺跡 20. 美濃山遺跡 21. 狐谷横穴群 22. 美濃山横穴群 23. 女谷・荒坂横穴群 24. 荒坂遺跡
25. 新田遺跡 26. 内里八丁遺跡 27. 上奈良遺跡 28. 内里五丁遺跡 29. 戸津遺跡 30. 天神社古墳 31. 松井横穴群 32. 向山遺跡
33. 大住車塚古墳 34. 楠葉東遺跡 35. 楠葉野田遺跡 36. 船橋遺跡 37. 招提中町遺跡 38. 九頭神遺跡（九頭神廃寺）
【30 ～ 33 は京田辺市、34 ～ 38 は枚方市】
a. 石不動古墳 b. 茶臼山古墳 c. 西車塚古墳 d. 東車塚古墳 e. 大芝古墳 f. ヒル塚古墳
g. 西二子塚古墳 h. 東車塚古墳 i. 柿谷古墳 j. 王塚古墳 k. 内里池南古墳 l. 御毛通古墳

推定・古山陽道

0 2km

図１　八幡市域周辺の弥生時代～奈良時代を中心とする遺跡分布図（S=1：50,000）

う。鍛冶炉跡付近から、美濃山廃寺では最も古相を呈する須恵器等が出土していることも、このことを示しているといえます。区画溝やその付近の掘立柱建物のなかにも、中心建物建設中に造られたものがあるかもしれませんが、本格的に機能し始めるのは、中心建物の成立と期を同じくする頃であると考えられます。区画溝内側、寺域北西の総柱建物ＳＢ2009等は、遺物の年代から寺院の前半期に機能していた可能性が高いと見られます。

寺院が存続した期間の後半、中心建物の北隣に、礎石・掘立柱併用のＳＢ2020が新造されます。瓦葺で東西６間以上と見られることから、講堂になる可能性も高く(1)、寺院中心建物のひとつとなるものです。このような観点からは、畿外の地方寺院にも例があるように(2)、美濃山廃寺の伽藍も数十年の長い年月をかけて完成されたとの理解も必要になると考えています。

ＳＢ2020が建つ頃には区画溝が埋められ、掘立柱建物が北へ展開したものと推測されます。覆鉢形土製品とひさご形土製品は、区画溝や弥生時代の竪穴住居跡等、この頃埋設された遺構から出土することから、寺院前半期に南側の中心建物において行われた仏事に使用された可能性が高いことが指摘できます。

この間、北東部の瓦窯で補修瓦を生産しながら、他寺院へ供給するための瓦生産も行われていたのでしょう。平安時代中期以降の遺物は皆無であることから、同前期のうちに寺院は廃絶したと考えています。

３．出土遺物から見た美濃山廃寺

寺域南半の遺構面が残存していないこともあり、竹薮の入れ土や谷埋め土に含まれていた遺物は、当遺跡を考える上で非常に重要な位置を占めています。それらの出土遺物も当遺跡が寺院跡であったことを示しています。全体では、土器類より瓦が圧倒的多数を占め、軒瓦からは在地的な繋がりが見られますが、既調査で奈良三彩の瓶等が出土しており、中央とのつながりも窺えます。特筆されるのは、覆鉢形土製品が、仮称「ひさご形土製品」と共にさらに多数出土し、平安時代中期以降盛行する小塔供養が、美濃山廃寺ではすでに奈良時代に行われていたと見られる点です。

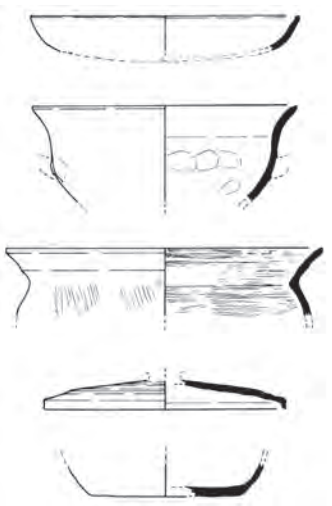
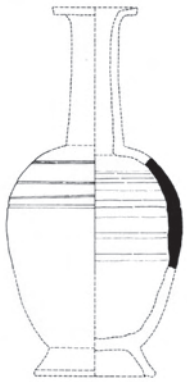


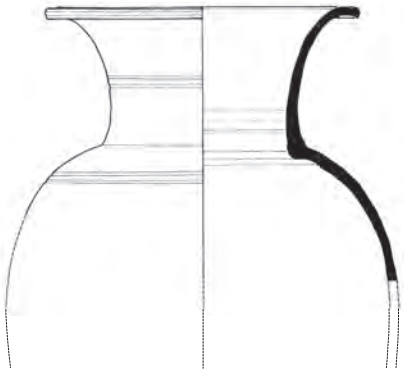
図２　美濃山廃寺第６次調査
溶解炉SL1関連（落ち込みSX20）
出土土器実測図（S=1/5）

覆鉢形土製品は、底径約9.5cm、高さ4.5cm前後、須恵質かやや軟質の半球状の土製品で、裾は鍔状に造り出しており、底面中央に径１cm弱の穴を穿ったもので、肥後和男によれば陀羅尼経を入れるための穴とされています(3)。今回の一連の調

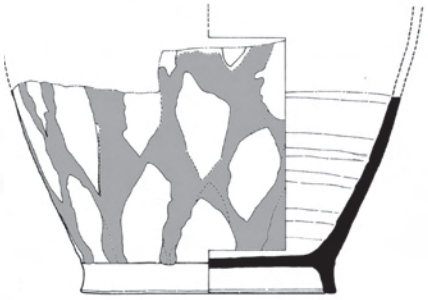
◆古代仏教寺院関連器物



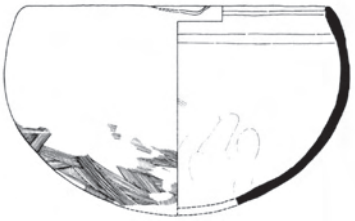
須恵器　壺（水瓶）S=1/5



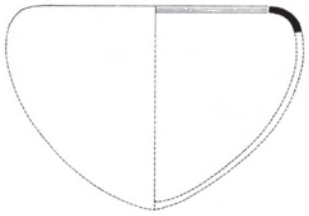
須恵器　壺（仏花瓶）S=1/5



奈良三彩　二彩壺（仏花瓶）S=1/5

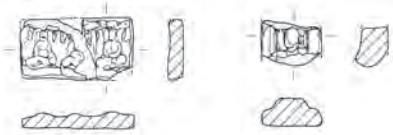


土師器　鉢（応器【鉄鉢】）S=1/5

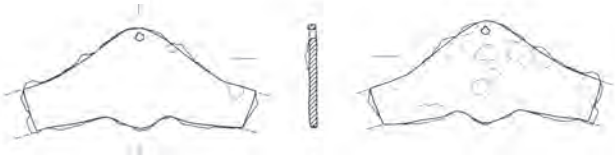


須恵器　鉢（応器【鉄鉢】）S=1/5

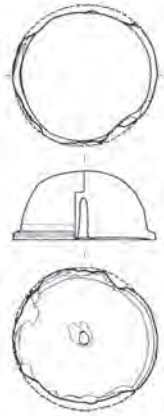
須恵器　鉢（応器【鉄鉢】）S=1/5



土製塼仏 S=1/3



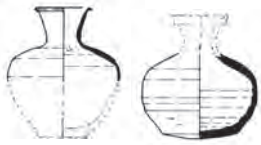
鉄製品（風鐸）S=1/6



覆鉢形土製品模式図
（小仏塔）S=1/5

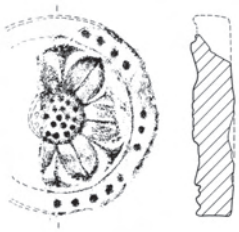
ひさご形土製品模式図
（小仏塔）S=1/6

◆古代仏教寺院に縁の深い器物

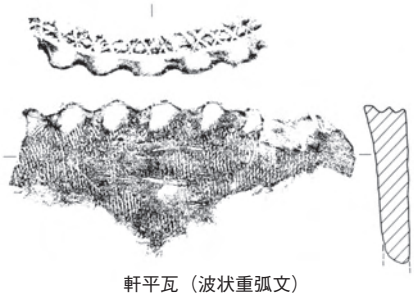


須恵器　小壺　S=1/5

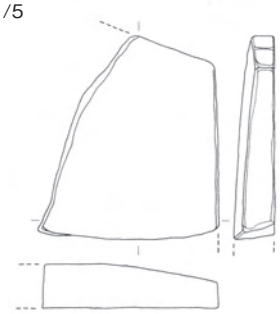
須恵器　円面硯（文具）　S=1/5



軒丸瓦（単弁六葉蓮華文）
軒丸Ⅰa型式　　S=1/6



軒平瓦（波状重弧文）
軒平Ⅰb型式　S=1/6



須恵質（軟質）塼［六角形］S=1/6

図３　美濃山廃寺出土遺物

査で新たに26点程が出土しました。出土位置の北限は第８次調査地の弥生時代の竪穴住居跡内上層で、区画溝からも出土していますが、多くが南部の第６次調査地から、遺構に伴わず出土しています。ひさご形土製品はひょうたん形の上部に二段の宝珠が付き、下部には何かに差し込むための突起が付くもので、13点以上が出土しています。胎土・焼成は覆鉢形土製品と酷似しており、出土位置も覆鉢形土製品と共通していて、同時期に同様の目的で使用された遺物と見られます。覆鉢形土製品については、同形状で小型のものが小塔供養に用いられるようになるのが平安時代中期以降であり、奈良時代での類例は全国的にも見られませんが、今回までの調査で30基以上も出土し、多数を作ることで功徳が得られる小塔（円塔）であることがほぼ確定的となりました。ひさご形土製品も、小（仏）塔に通じる要素を十分に具えており、覆鉢形土製品と同場面での使用法も含めて仏教法要に用いられたものと推測されます。塼仏は、第６次調査の溶解炉から１点、第７次調査地から金箔が残る塼仏など数点が出土しています。なお、美濃山廃寺から出土した遺物の内から、古代仏教寺院であることを直接的に示す器物類と、同寺院に縁の深い器物類を実測図を用いて呈示しておきます（図３）。

軒　瓦　範囲確認調査で創建期に九頭神廃寺（枚方市）(4)と同文の素弁六弁蓮華文軒丸瓦と波状重弧文軒平瓦のセットが用いられたと推測していましたが、出土数や位置から八幡市西山廃寺・志水廃寺(5)に同笵がある複弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文も、合わせて創建

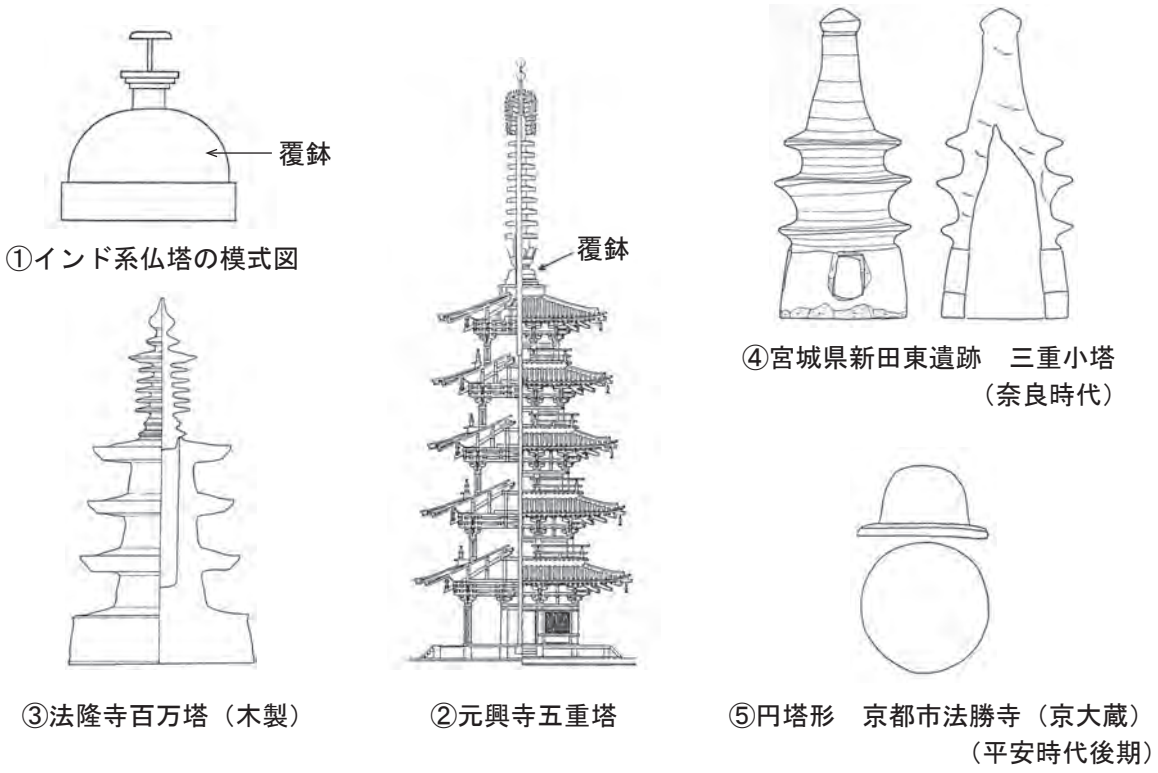


図４　土製小塔関連資料

期の中心建物に用いられた可能性が高くなったと考えています。ＳＢ 2020 に用いられた単弁八弁蓮華文軒丸瓦は同笵例がなく、成形技法も上野国分寺等で見られますが周辺に類例のない「横置型一本作り」技法（6）です。その他、平城宮軒丸瓦 6135 Ａ型式と同笵の軒丸瓦の出土も見られ、寺院存続期間後半期の瓦には百済寺（枚方市）と同笵の軒丸瓦がある等、軒瓦の系譜については在地での繋がりから出発しながらも、都城や他地方との関係も窺える複雑な様相を呈しています。この瓦のあり方からして、九頭神廃寺と同笵の朝鮮半島の軒瓦に繋がる要素がある点を、渡来人にすぐに結びつけるのは難しく、必要に応じ近在や関係先から瓦笵あるいは工人を調達したように見た方が、理解がしやすいと考えています。

４．遺跡の年代観

範囲確認調査の報告では、遺跡の年代観について、美濃山廃寺は奈良時代前半頃のうちに創建され、以降 100 年間ほど存続し、９世紀半ば頃には廃絶したものとの考えを提示しました。寺院存続期間中の前半期に属するとした遺構から出土した土器群のなかでも古相を示す土器群は、都の編年で京Ⅰ期新～京Ⅱ期古（古相）頃（7）に併行するといえるので、８世紀前半半ば頃～８世紀中葉（奈良時代中期頃）の実年代を与えることができます。存続期間中の後半期の遺物のうち、最も新相を示す一群は、京Ⅲ期（京都Ⅱ期）古に併行するといえるので、実年代は９世紀半ば頃を目安とすると考えました。今回の調査で、寺院の造り始めの年代が少し遡ることは首肯できますが、寺院の様相がほぼ整う成立期とその存続期間の年代観については、大きな変更は要しないと考えています。

今回の調査で、府埋文センターによる報告書によると、寺が成立する以前の７世紀中頃に鍛冶炉と溶解炉が造られ、Ⅰ期（７世紀後半～８世紀初頭）に区画溝が造られ、Ⅱ期（８世紀前半～中頃）に丘陵中央部の東西棟の掘立柱建物や北東部の総柱建物など、Ⅲ期（８世紀後半～９世紀初頭）にＳＢ 2020 が建てられ、Ⅳ期（平安時代前期）に廃絶したものとの考えを提示されています。

Ⅰ期は出土した須恵器の飛鳥地域での型式編年的年代観を、山城地域へのスライド的適用のみを根拠とした上で、廃棄もその時間内との考え方で設定されたものと見られます。地方での型式編年が飛鳥地域と全く同等に進むことは、これまで実証的に提示された例を見たことがありません。中心地で出土が見られなくなった古墳時代的な古相なものが、山城地域では生産が継続しており、消費はさらに下った年代まで続くとの見方をしています。このⅢ期説に対して、Ⅰ期はⅡ期へ包摂し、その年代が７世紀末を含む形での奈良時代前半から中葉頃との考え方で見れば、Ⅱ期は寺院存続期間中の前半といえます。後半は

Ⅲ期とされている奈良時代後葉頃から平安時代前期中頃と考え、大きく２時期に分ける見方で、寺院の変遷史を理解し、地域史に十分位置付けられると考えています。

土製小塔の年代観については、寺院存続期間前半期の遺物との見方を首肯したうえで、前半の内では最終段階の、８世紀中葉頃の製作品と推定しています。日本における小塔供養の歴史は、称徳天皇により宝亀元（770）年までに製作された百万塔に始まり、これより古い小塔供養の実例は文献・出土資料ともにこれまで見ることができません。八幡を中心とする地域の年代観からすれば、美濃山廃寺の土製小塔が百万塔に大きく先行する考え方をとる必要はないものと考えています。

５．美濃山廃寺の造営氏族と古墳との関係

八幡市域の３古代寺院のうち、造営主体が在地勢力によると見られるのは美濃山廃寺と志水廃寺です。この２寺院間は２km と近いのですが、木津川左岸では美濃山廃寺の南隣に位置する興戸廃寺（京田辺市）は、４km 以上とかなり離れて位置しています。八幡市南部に連続する京田辺市の北西平野に住む人々は、現在では市境を内包していますが、八幡市南部の人々と地域意識を共有していたと見られ、八幡市北西部から美濃山丘陵部の傾斜地に連続的に展開する横穴墓群も、この地域の人々が作り出した墓と墓域であり、美濃

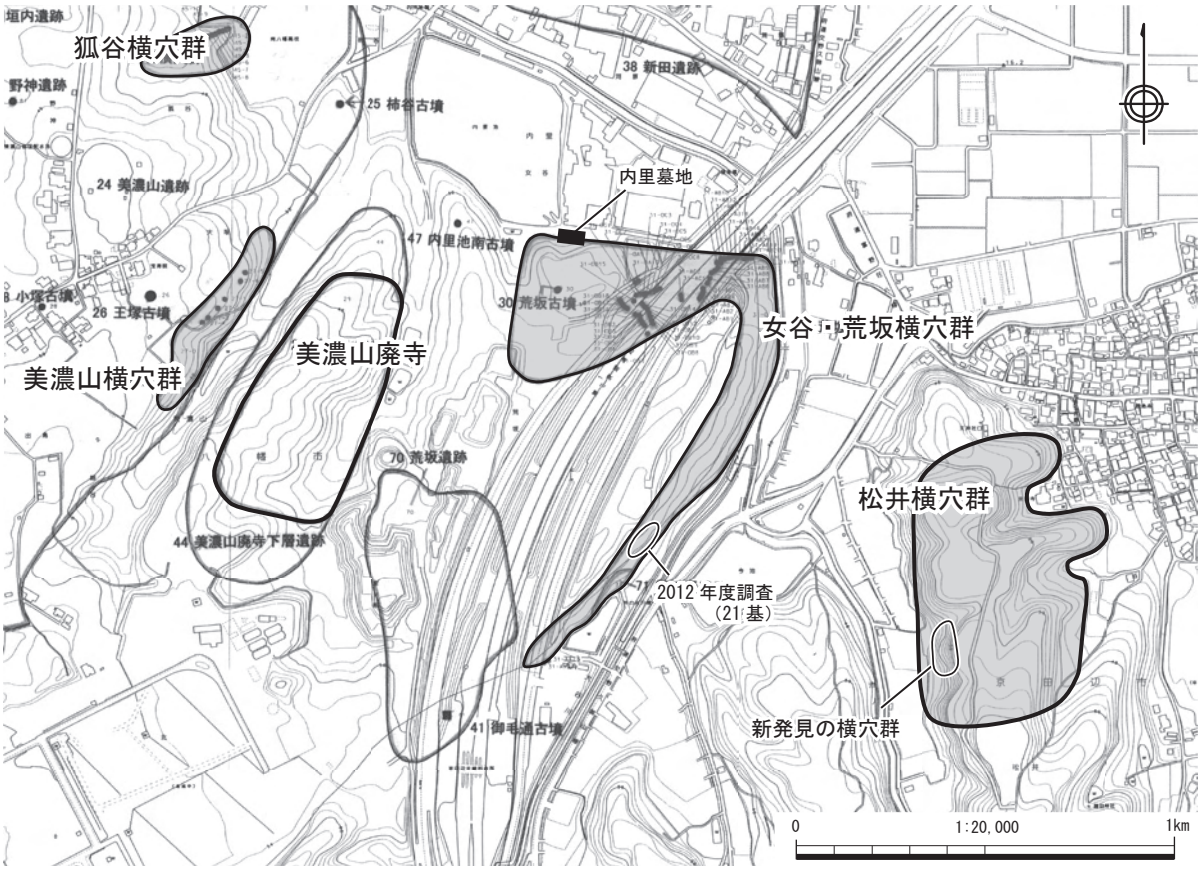


図５　美濃山廃寺と横穴墓群　遺跡分布図　（S=1：20,000）

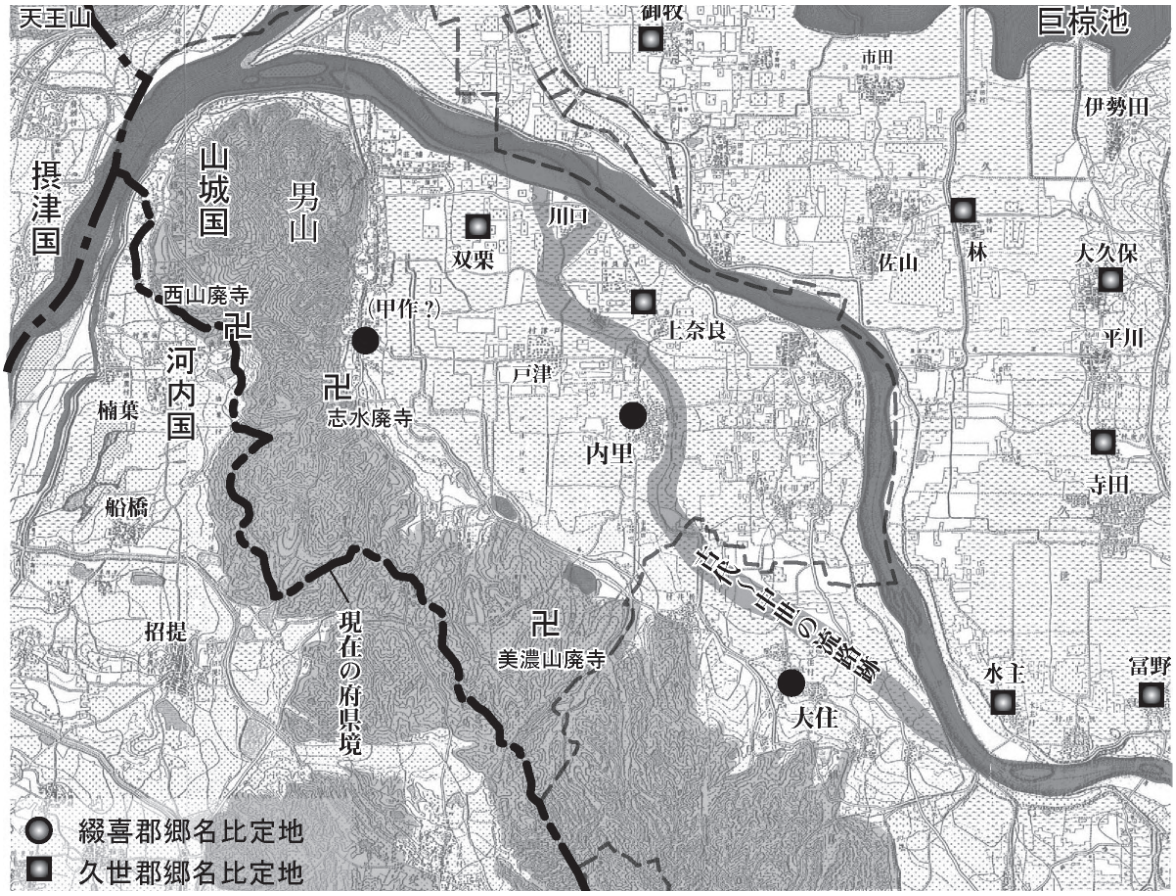


図６　『和名類聚抄』郷名比定地と古代寺院
（大日本帝国陸地測量部発行仮製二万分一地形図に加筆）

山廃寺の造営に関わった主勢力もこの地域の在地勢力であったと見ることは大過ないでしょう。図６は、平安時代の郡郷名が書かれた『和名類聚抄』に見える郷名比定地を図示したものですが、綴喜郡の郷に当てはめると、志水廃寺は甲作郷、美濃山廃寺は有智郷・大住郷が、その造営・運営を支えた人々の分布域として考えられます(8)。美濃山廃寺周辺は江戸時代、美濃山新開として村ができるまでは内里村に属しており、関係の深い地域でした。内里周辺でこれまで発見された美濃山廃寺と同時期の集落遺跡としては、内里八丁遺跡があります。しかし、飛鳥時代から平安時代初頭の官衙的な大型建物群が検出された内里八丁遺跡は、一般の集落とは性格が異なります。また久世郡と綴喜郡の古代の境界は木津川でしたが、内里八丁遺跡は古代の木津川の東にあるので、久世郡那羅郷に属していたと見られるので、綴喜郡有智郷の中核をなす未発見の集落があり、ここに美濃山廃寺を支えた古代の集落があった可能性を考えています。

これを踏まえ古墳の分布を見ると、志水廃寺の周辺には古墳時代前期に継続的に築造された前方後円墳が立地しており、志水廃寺の造営氏族はこれからつながる勢力とも考えることができます。一方、美濃山廃寺の周辺では、古墳時代前～中期とされる大住車塚古墳と、

美濃山廃寺にごく近い小古墳の関係、中期の前方後円墳である王塚古墳との関係など、課題は多いのですが、古墳時代後期の横穴墓群を築造した集団が造営主体であることは明らかです。美濃山廃寺は横穴墓群が所狭しと並ぶ斜面の上部に立地しており、女谷・荒坂横穴群11次調査では美濃山廃寺のものと見られる平瓦が横穴墓から出土しています。

さらに興味深いのが、横穴墓と美濃山廃寺の先後関係です。既存の土器の年代観から、横穴墓が終了した後に廃寺が創建される見方が一般的でしたが、狐谷横穴群では8世紀前半の土器が墓室内から出土しており、平成24年度に実施された女谷・荒坂横穴群の調査成果でも、新規築造が続いていたかの判断は難しいですが、美濃山廃寺の中心建物ができた後も、奈良時代まで墓としての使用が継続していたものと考えています。畿内ではこのような資料に対する既研究は多くはありませんが、平安時代前期以降にも多くの横穴で土器の供献が認められる点と共に、今後分析が必要です。

6．まとめ―美濃山廃寺の姿―

丘陵の字名が「古寺」である影響か、早くに廃寺との遺跡名を冠されていましたが、基壇建物も発見されないため、本当に寺院跡であるのか長らく議論がありました。近年、九頭神遺跡の発掘調査で発見された「倉垣院」として話題になった建物群のように、周辺寺院跡でも掘立柱建物で構成される「付属院地」の発見が相次いでいます(9)。美濃山廃寺の今回の調査で、遺構や瓦類だけでなく、塼仏や土製小塔等の遺物からも当初約90 m強の方形区画を有した寺院跡であることが実証的に把握できた意義は大きいといえます。

美濃山廃寺は、横穴墓との関係から、古墳時代の祖先祭祀とその変質に直截に関係する古代寺院の典型例のひとつといえるかもしれません。しかし、類例のない礎石・掘立柱併用の中心建物や、土製小塔と見られる遺物の存在は、一般的な古代地方寺院とは異なる側面を持ち、山城の一地方寺院ではありますが、多面的な理解が必要なことを示しています。最先端の小塔供養を行うような寺院が、地域とどのような関係をもつのか、遺跡の立地論や遺物の分析から、今後も検討を要する重要な課題が残されています。

参考文献
（1）上原真人氏のご指摘による。
（2）亀田修一「地方寺院の伽藍配置と造営過程」『飛鳥文化論攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会　2005年
（3）肥後和男「日本発見の泥塔について」『考古学』第9巻第4号　1938年
（4）竹原伸二『九頭神遺跡―九頭神廃寺―』枚方市文化財調査報告第32集　枚方市教育委員会　1997年
（5）両寺院出土資料は、同志社大学歴史資料館編　同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集『南山城の古代寺院』 2010年に整理
されている。
（6）梶原義実「横置き型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」『名古屋大学文学部研究論集』史学54　2008年
（7）土器の編年は、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房　2006年　による。
（8）当地域の横穴墓の系譜を考える上で南九州の墓制と関係付け、正倉院文書「山背国隼人計帳」に見える8世紀初頭に大住郷に居住　　していた隼人と関連付ける考えがある。同計帳には内臣と婚姻関係をもつ隼人の存在が知られる。

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

http://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189